
blend-ブレンド-

高天リオナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

blend - ブレンド -

【Nコード】

N9901S

【作者名】

高天リオナ

【あらすじ】

棕本翼はまもと ひとしは、普通の女子高生になれるはずだった。奨学生として進学する双子の弟が怪我をし、入院してしまっただけで大変。

その替え玉として、なんと男子校に通うことに！？

01・君の「ほんと」を知ってるよ

高校の入学式を明日に控えた日、私はその不吉な知らせを貰った。病院の廊下をひた走り、ただただ、無事を祈る。

「あっ・・・！」

すれ違い様、肩がぶつかり、倒れ込みそうになったのを、素早く伸びた手に捕まれ、どうにかことなきを得た。

「大丈夫？」

「ご、ごめんなさい！」

「・・・いや」

「あの・・・有り難うございました。それじゃ、急いでますので・・・本当に、有り難う！」

深々と頭を下げ、挨拶もそこそこ、相手の顔もろくに見ずにその場を後にする。

目的の病室に辿りつき、ドアを勢い良く開けた。

「よー」

「・・・無事、なの？」

「うん。生きてる」

「良かった・・・」

バツが悪そうな笑顔で、五体満足とは言えないものの、どうにか元気そうな姿を見、私はその場にへたり込んだ。

全ては、弟のうつかりが招いたこと。

意中の高校へ奨学生という有り難い身分での進学が決まり、浮かれまくっていたのだろう。つまづいて転んだ拍子に打ち所悪く、肋骨一本と右足を折って入院した、らしい。

そして、この一件により私はとんでもない状況下へ身を置くことになるのであった。

なぜ、私はこんな所に居るんだろう・・・。

なぜ、私はこんな格好をしているんだろう・・・。

なぜ、私が――。

目の前にそびえる大きな門を前に、ただ、肩を落とす。

それはまるで、怪しい異世界への入り口のようにも思え、自分は一体、どんな目に遭うのか。もし、バレたらどうなるんだろう・・・。そんな、危機感ばかりが募る。

それでも、私はこの門を超え、中で生活しなくてはならない。

例え、ここが普通の学校でなくても、だ。

「一ヶ月の辛抱・・・」

右を見ても、左を見ても、同性のいない状況下、私は門の中へと足を踏み出した。

“私立高天原男子高等学校”・・・それが、門の横に掲げられた学校名。

男子学生の制服に身を包み、素顔を誤摩化すために野暮ったい眼鏡を掛けて、髪も短く・・・見た目こそ男の子だけど、言うまでもなく、実際の性別はれっきとした女の子。

なのになぜ、私がこんな格好でこんな場所にいるのか・・・それは、いわゆる複雑な家庭事情のせいだった。

「翔つたら・・・このタイミングで怪我なんかして・・・バカッ」

今頃、病院のベッドでふせっているであろう弟を想い、毒吐く。
と、タイミング良く、内ポケットにしまっていた携帯が震え、メールの受信を知らせた。手早くフリップを開け、送信者と内容を確認して・・・肩が怒る。

「ふ・・・ふざけんな!!」

「？」

「あ・・・あは・・・」

思わず、声に出して文句を言ってしまい、少なからず集まってしまった回りの視線から逃れるみたいに、早足で校舎の影へと駆け込

んだ。

人目がなくなつたのを確認し、今一度、携帯画面を見つめる。
メールは実母からだ。

そこにはこう書いてあつた。

『翼ちゃん、無事に学校ついた？くれぐれもバレないように、気をつけてね。翔ちゃんの未来は、貴女の手腕に掛かっているの。そうそう、住む所もちゃあんと手配しておいたから・・・存分に男の園とやらを満喫して来てネ。貴重な体験、羨ましいわあ。うふふふふ
by ママン ♪』

ピキツと額に青筋が浮き立つのが自分でも解る。

勝手なことばかり言いやがって・・・同じ女だというのに、貞操に
関しての危機感はないのか？娘への配慮が全く感じられん。

だいたい、本来なら私だって華の女子高生として、新しい生活が
始まる予定だったのに・・・

改めて・・・私の名前は棕本翼くろもとつばきと言います。

けど、ここに立つ男子学生としての翼は、棕本翔くろもとかける。

実弟にして、双子の彼の替え玉というのが、今の私の立場と・・・
任務だ。

「——どうした。自分の教室の場所が解らないのか？」
「へ？」

唐突に掛かった声に、慌てて、携帯のフリップを閉じた。

「きみ・・・新入生だろう？早く行かないと、授業に間に合わないと思うが・・・」

なおも言葉を掛けて来る上級生らしき姿を追い、振り向く。

今時珍しく、染め上げていない黒髪は小綺麗に揃えられ、一見して、真面目な優等生といった感じ。威圧感のある、落ち着いた風体はどことなく、彼がただ者ではない気がした。

てか、そこらの男子と質が違う・・・つまり、美形さん。

最も、私には翔という弟がいて、こいつが結構、男としての見目は上質らしく、悪い意味で目が肥えてしまっているのか、意識する乙女心が変に欠落していた。

よって、そういう方面での免疫はばっちり。容姿で動揺したりはしないのだ。

そんなことより・・・うん、実はあなたの言う通りです。

替え玉生活準備に手間取り、昨日の入学式を休んでしまった私には、自分の教室が解らなかつたりする。

「あー・・・そうなんです。ええと、1Cの教室ってどの辺でしょうか・・・？」

「1C？ということは・・・きみが棕本翔か」

「どうしてわた・・・僕の名前を・・・？」

「入学式に休んだ新入生はきみだけだし、俺、寮長でもあるから。

確か、寮入りも今日からだろう？・・・三年の甲斐谷周防だ。かいたにすあう宜しく」

はあ・・・この人、寮長なのか。どんな偶然なんだか・・・。

「・・・棕本・・・翔です。宜しく願いします」

「ああ。とりあえず・・・教室に案内してやろう。ついて来い」

「え？あ・・・は、はい」

ぞんざいに言って歩き出した先輩の背を慌てて追う。

うーん。探し歩く時間はないようだし、この親切かもしれない先輩の好意に甘えるでしょう。

ほどなく、1Cのプレートが掲げられた教室に辿り着き、先輩は用は終わったとばかりに方向転換。

「あ、ちょっと・・・」

思わず、その腕を掴むと怪訝な表情で首を傾げられた。
いや、あの・・・お礼ぐらい言わせて下さい？

「・・・お気に掛けて下さって、有り難うございました」

ぺこつと頭を下げ、丁寧にお礼をする。

あ・・・こんな言い方、全然、翔らしくないや。

内心で焦りつつ、こういう場合、翔だったら・・・と思う態度で言い直す。

「エート・・・引き止めて、すみませんでした！いや、先輩が善い人で、すごい、助かった。また迷ったらお願いシマース」

あははと空笑いするものの、相手のどこか冷めた視線に気づき、顔が引き攣る。

「まあ・・・自分の教室ぐらいは早く覚えることだ。また後で・・・寮で、な」

言って、先輩は去って行った。

ふうむ・・・わざわざ送り届けてくれたことから判断するに、冷たい人ってことはないんだろうけど・・・それとも、同じ寮生だから寮長として、仕方なく世話を焼いただけ？

「へえ・・・生徒会長はんにエスコートされて来るやなんて、すごいやないか」

入れ替わるように耳元で囁かれ、ギョツとする。

驚いて見上げた先で、不敵に笑む顔もまた、美形くん。長めの茶髪、耳にはピアス。どこか軽い雰囲気の子。

「入学初っぱな休んだクラスメイトはどないやるかと思うたら・・・ふーん、こないな子やったんか。なんもかも目立つなあ？ 棕本翔

くんは」

独特のイントネーションで言われ、ジロジロと値踏みするみたいに見つめられ、ムツとする。

ナニ・・・この男。初対面の相手に、その態度は失礼ってもんでしょ。

「つてか、誰？ご存知の通り、僕、初っぱな休んで名前とか解らないんだけど？」

「ああ・・・すまんすまん。おれ、小笠原空夜。おがさわらくうやこれから、よろしゅう。翔って呼んでええよな？おれのこと空夜でええから」

「・・・よろしく」

「ちなみに、おれも寮暮らし。翔とは、同室やから、そっちでもよろしゅう」

さらりと言われた言葉に、私は我が耳を疑う思いで訊ねる。

「同室・・・寮って・・・もしかして、合い部屋・・・？」

「うん、せや。一年、二年は二人で一部屋の割り当てらしいで？個室貰えるようになるのんは、三年になってからみたいや」

「そっ・・・なんだ・・・」

出来れば否定して欲しかったそれに、自分が最も怖れる最悪のパターンである状況の回答を頂き、本気で目眩がした。

これで私に安住の地は・・・開放的な時間はないということになる。

24時間態勢で、女とバレない努力をしなければならない。

ああ・・・神様。

迷える男装の子羊に、どうぞ、慈悲を・・・厚い御加護を宜しくお願ひします・・・。

「ま、そう、嫌な顔すな。別に翔の行動に干渉なんかせえへんし、ほどうい気楽さで助け合お」

に「っこりと無邪気な笑顔を向けられては、態度を硬くするのも悪い気がして。

「うん、よろしくね。空夜」

つられるみたいに笑みを返した。

と、空夜は驚いた風に見開き、急に真顔になって、何事か悩み始める。

なんだろう・・・私、気に触るようなことした？

「どうしたの？僕、なにか変なこと言っただけかな・・・」

「・・・いやあ。ちよつ、びつくりしただけ。んー・・・翔、気をつけや？」

「なにが？」

「男ばつかやからって、安心し切ってあんまり、無防備に笑ったりせえへん方が身のためやってこと」

どういう意味だろう・・・さっぱり解らない。

今度は私が真顔で悩み始め、それを見た空夜は苦く笑った。

「気づいてもうたわ。翔のソレって、誤摩化すためやる？ほんまは
ちやうねんな？」

ドクンと心臓が高鳴る。

女だつて・・・気づかれた？・・・どうして・・・。

見目は・・・わざわざ髪を短く切つて、胸は古典的にサラシ巻いて
押しつぶしてるし、言葉遣いや立ち振る舞いにも気をつけてたはず
なのに。

どこでバレたんだろう・・・。

「あ・・・の・・・」

「その眼鏡。伊達やる」

「・・・は？」

黙っていてくれと頼もうとして、予想外な指摘に、目が点になる。
眼鏡??

思いっきり首を傾げて、理解不能をアピールすると、不意に伸ば
された手が視界を被っていたレンズを奪い取った。

ジッと間近から顔を覗き込まれる。

「ちょ、ちょっと！いきなり、なにす——」

「あ、やつぱ・・・眼鏡外したら可愛い系の美形くんやわ。つまり・・・翔みたいのんが趣味のヤツも居るんよ」

「趣味って・・・まさか」

「そ。信じらへんやろけど、男ばっかの中にあり、同性をそういう対象として見てアプローチしてくる輩ってのが、実際、居るらしいんよ。だから、気をつけー、と」

「は・・・はは・・・」

女だとバレるのはもちろん問題だけど・・・そんなモテ方は嫌だなあ。

どうやら私は、別の意味合いでも隙を見せられないみたいだ。

01・君の「ほんと」を知ってるよ（後書き）

挿絵を削除し、文章のみの閲覧とさせていただきます。

02・そういつトコも好きなんだけど

「早いもん勝ち言うことで、おれが下のベッド。翔は上な。クロージェットは二つあるから、それぞれ使うとして・・・あとは、ま、適当に」

備え付けのそれらを差し示し、空夜がさも当然のように主導権を握って割り振りする。

二人部屋というだけあって、広さは12畳ほどもあり、それなりに快適な空間。

なにより、私にとって有り難かったのは、部屋にバストイレ完備だったこと。

よかった・・・共同の大浴場とかだったら、毎回、銭湯にでも通わなきゃならないところだ。そんなの資金的にも、行動的にも危険すぎる。

「飯は食堂で定められた時間に食う決まりやけど、外食やら買い食いもオツケー。その場合、完全自腹や。洗濯は一階にコインランドリーあるし、掃除機も貸し出してるみたいやけど・・・ドアノブにこの“洗濯・清掃希望”のプレート掛けて汚れ物出しとけば、専門の人らがしてくれるらし。いわゆる、ホテルみたいなシステムなん」

部屋の中を見回せば、テレビにDVD付きビデオ、冷蔵庫、湯沸かし器・・・そう、まさにホテル並みの電化製品が設置されていた。ふーむ・・・さすが私立。至れり尽くせり・・・。

「ちゅうか・・その馬鹿でかいカバンも宅急便で送ってまえば良かったのに・・。荷物届くの遅れたら遅れたで、着替えぐらい貸すで？」

後生大事に抱え持ったカバンを見、彼は苦笑した。

そんな危険な真似ができるか・・。

このカバンの中身だけは、人知れず、確保しておかなくてはならないというのに・・普通に荷物として送ったら、誤って人目に触れてしまう可能性があるじゃないか。

「あー・・まあ、意外に早く宅急便つくものだなあと」

「最近の宅急便は優秀やからな。とりあえず・・荷物片付けるん？」

「もちろん。段ボールのままじゃ落ち着かないし・・」

「そか。手伝い必要ならするけど、一人の方がやりやすいやろか？」

「——っん」

「んじゃ、おれ、適当に知り合いんとこ遊びに行つて来るわ。片付け頑張り」

見た目は軽い感じだけど、意外に空夜は、こういうさり気ない気配りができるいいヤツらしい。

「ありがとう。いつてらっしやい」

今にも去ろうとする背中になんて言つと、彼は少しだけ照れた風に

笑い、

「はは・・・いつてらっしゃいつて、なんかええな。うん、いつてきます」

元気に応えて、部屋を後にした。

さて・・・空夜が戻って来ないうちに、手早く片付けてしまおう。まずは大きなカバンを開く。中には予備のサラシと替えの下着や生理用品なんかがぎっしり。

最大にして最高にヤバい代物・・・これはこのままカバンにしまっておくのがいいか。専用の南京錠をロックすると、鍵にシルバーチエーンを通し、首から下げた。

服は当たり障りのないところを選んで詰め込んだし、足りない分は翔のを拝借。日常品もシンプルな物をわざわざ買いそろえ、化粧品なんかはユニセックスものに変更。

片付けは、案外に早く終わる。

まあ、たった一ヶ月の生活用品。そう、物数が多くないから、当然と言えば当然。

時計を見れば、まだ、夕食には間があつて・・・お茶でも入れて、テレビ見てようかな・・・。って、茶葉とかあるんだろうか・・・。

ごそごそと台所の棚を探る。そこには、インスタントコーヒーに粉末ミルク、砂糖、日本茶、紅茶各種が・・・どこまでも気の回ることだ。さすがにお茶菓子はないけど・・・。

感心しつつ、持ち込んだ自分専用のカップにティーバッグを落とし、お茶の準備していると、部屋のドアをノックする音が耳に届いた。

んん？誰だろ・・・空夜なら、わざわざノックなんてしないだろうし・・・。

「はい？」

「・・・甲斐谷だが」

聞き覚えのある声と名前に、ドアを開く。

今朝方お世話になった先輩がいた。

あー・・・確か、寮長だつて言つてたから、様子見に来たのか。しかも、この人、生徒会長でもあるんだよな・・・。

空夜が初っぱな洩らした言葉を思い出し、つくづく目の前の人の有能さに圧倒された。

「・・・掠本？」

黙つてジロジロ見つめてしまったのを不審に思ったのか、先輩が不振な目を向け、首を傾げる。

やば・・・かなり挙動不審だ。

「・・・こ、コンバンワ。朝は有り難うございました」

「ん・・・今晚和。少し、時間いいか？きみ、一日遅れで入ったから、寮生活についての説明がまだだろう」

「えーと・・・一応、空夜——同室の小笠原くんに聞きましたけど」

「小笠原？そうか・・・きみの同室は、あいつか。それで、なにを聞いた？」

「食事の時間と洗濯、掃除のことですかね」

「・・・それでは、全然足らない」

やれやれと苦笑する先輩。

「・・・集団で生活する以上、ちゃんと決まりを知り、従ってもらわねば困る。そのために、ゆっくり話せる状況に身を置かせてくれると助かるんだがな」

暗に最低限の礼儀として、部屋の中へ通せということだろう。
それには私も賛同でき、慌てて、招いた。

「すみません、どうぞ・・・。あー、なんか飲みます？自分は紅茶なんですけど」

「きみと同じ物でいい。砂糖は抜きで」

「らじや。てか・・・ココの寮ってすごい設備いいんですね」

「——私立校だからな。あらゆる方面から援助があるんだ」
「なるほど・・・」

まじで設備良過ぎよ。うちの実家より快適じゃないの？そのくせ、奨学制度で学費ばかりか、寮費も免除だなんて・・・。

一般校通いの私としては、かなり羨ましい状況だけど・・・他でもない、翔自身の才能と努力が評価されたってこと。

うん、やっぱ替え玉して正解かも。身内として、喜ばしいことと応援してあげないかね。

「では、早速・・・食事と洗濯、掃除については聞いたんだっとな。寮の門限は七時。やむを得ない理由で過ぎる場合は、寮長である俺に連絡を入れること。これが連絡用のケー番。きみのも教えてくれないか？登録しておく」

「あ・・・はい・・・」

お互いに携帯を取り出し、ケー番を登録し合う。

翔には女の子らしくない色だと言われたアクアブルーのそれが、今、この場面で小さいながらも、男としての私を救うことになるうとは・・・自分の趣味を賞賛したい。

それにしても・・・個々の都合で入って来る連絡に、いちいち対応しなきゃならないなんて、寮長って大変よね・・・せめて、私は手を煩わせずに済むように気をつけよう。

「あと・・・奨学生限定でやってもらねばならないことがある。今年の対象者はどうやらキミだけのようだから・・・少し、忙しいかもしれない。覚悟してくれ」

へ？なにそれ・・・初耳よ？

「はあ・・・僕はなにをすれば？」

「主に寮生三年の補佐だ。食事時間になったら呼びに行ったり、用を申し遣ったり・・・」

「それって・・・平たく言えば、パシリ？」

「・・・そういう言い方もあるな」

いや、補佐なんて小綺麗な言い方より、そっちのがしっくりくる
と思いますよ？

私は余程、素直に胸の内の不快感を表情に出してしまったのだろ
う。

甲斐谷先輩は幾分か取り急ぐ風に、その実というものを口にした。

「奨学生は色々と免除される、実質的に大きな得があるからな。そ
ればかりが目立っては、羨望と好奇の目を向けられ、陰湿な苛めに
発展する怖れがある。人間的なバランスをはかるための・・・これは、
あくまで防護措置なんだ」

「つまり・・・パシリなのは見せかけ？」

「ある程度は役立ってもらうが・・・無理な注文にまで従順になるこ
とはないということだ。どうしても嫌だったら断って構わない。そ
こで文句が出たり、無理強いされるようなら、逐一、俺に報告しろ」

まあ・・・これだけ優遇されるからには、なにか裏があるだろうこ
とは覚悟していたけど・・・パシリかあ。

女であることを隠しつつ、パシリ生活・・・先輩の人数が多ければ
多いほど、あらゆる角度で危険が伴う。

「ええと・・・ちなみに寮生三年ってどれくらいいるんです？まず、
甲斐谷先輩と・・・あとは・・・？」

「俺を含めて四人だ」

「あれ・・・意外と少ないですね？」

「三年ともなれば、制約とかが煩わしくなるらしくてな・・・あまり
残らないんだ」

門限七時だもんね。

夜遊びしたい盛りに、中学生かって感じだし・・・納得。

「ふむ・・・どうせなら、挨拶回りしておくか？」

「あー・・・甲斐谷先輩の都合がいいなら、お願いしたいですね」

「では、行こうか。俺と一緒にの方が・・・安全だろうしな」

途端に表情を引き締めた先輩の様子に、一抹の不安が過る。

と、同時に、私はまたもや先輩の腕を掴んだ。

再び、怪訝な表情で首を傾げらる。

「またお世話になっちゃいますね・・・有り難うございます。やっぱり、先輩は善い人です」

満面に笑みを浮かべて頭を下げると、目の前の表情が初めて見る種類の柔和に代わり、やんわりと微笑まれた。

「きみのそういうところは・・・好きだな」

イケメン慣れした私にとっても、その笑顔は十分過ぎる魅力を持つて襲い掛かり、不覚にも赤面してしまう。

これが・・・俗に言うところの、王子スマイルか。

男の園・悔り難し。

03・押しても駄目なら引いてみる

なんというか・・スポットの当たるところに登場する人らは、得てして綺麗所なのは仕様なのだろうか。

右側でニコニコと微笑む眼鏡な彼は、みなとあさき皆戸浅葱先輩。
真ん中でしどけない艶やかな視線を送って来るのは、あいざわともき相沢朋生先輩。

そして、左側で興味無さげに一瞥したきり、本を読んでいるのは、せなかずま瀬名和馬先輩。

甲斐谷先輩の召集で急遽、集まった彼らが、ある意味、私の主人とも言える立場の人間たち。

「——例の奨学生だ。顔合わせしておいた方がいいと思って、連れて来た」

「・・棕本翔です。宜しく願います・・」

「みんな、あまり無理な注文はするなよ？」

少しの牽制がこめられたそれに、皆戸先輩が苦笑する。

「確かに・・あまり無理は言えなさそうですね。また、随分と、可愛いらしい子がパシリになったものです」

「まあ、別な部分で役立ってもらって手もあるけど・・。ン、なにか香水つけてる？甘い匂いがするね・・」
「ひゃっ!？」

いつの間にか傍に立った相沢先輩に抱き寄せられた。そのまま顔を近づけた彼は、クンッと首筋の匂いを嗅ぎ、うっとり微笑む。
てか、腕！腕が腰につ！！

「うわー・・・翔くん、すごい腰細いね？もつと食べないと・・・あ、でも、肉付きは悪くないのか・・・全体的に、丸みがあつて・・・抱き心地いいかも？」

なおもベタベタと触られ、ぎゅっと抱き込まれ、鳥肌がたった。
警鐘が鳴る。

危険危険、バレるバレる。ヤバイヤバイの三拍子。

「は、離してください・・・」

もがいて、本気で拳を振るおうかと思った瞬間、相沢先輩の身体が吹っ飛ぶ。

え・・・これは・・・私がやったんじゃない、よね？

「貴様・・・オレの目の前で気色の悪い真似すんじゃないよ。クロスぞ？」

物騒な台詞を口に、拳を突き出した形を取っていたのは、瀬名先

輩だった。

「痛ってー・・・そうは言うけど、和馬もちよつと触ってみ？ホント、心地いいから」

「なにが悲しくて男の身体、触んなくちゃなんねーんだ・・・それ以上、ふざけたこと吐きやがったら、今度は手加減なくぶつ飛ばすぞ、トモ」

「んだよー。そう、邪見にすることないだろ？だいたい、和馬は偏見持ち過ぎ。人それぞれの趣味は自由じゃないか」

「オレの目の届かないところでなら、好きなだけその趣味とやらに走ればいい。ただ、オレは見たくねえと言ってたんだ。個々の領域を護れつてのが、そんなに道理に外れたコトかよ？」

剣呑になってゆく先輩方。

原因は・・・私、なんだろうか・・・？

まあ、実際は女だし、性的特色で皮下脂肪が多いのは仕方ないことなんですが・・・。

もちろん、そんな事実を口に出来る訳もなく、ただ、彼らの様子を黙って見てるしかない。

「・・・くだらないことで言い争いはよせ。椋本が困ってるだろうが・・・」

大きな溜息と、呆れ返った声音で水を指したのは、この寮を取り仕切る寮長様。

先輩方の目が、一斉に私に向けられる。

・いや、気遣いは嬉しいんですが・・・これはある意味、かえってプレッシャーに。

「ああ、驚かせてしまいましたね。彼らのこれはいわば、コミュニケーションですから、気にしないでいいですよ？」

やんわりとした口調で、皆戸先輩にフォローされ、どうにか肩から力を抜く。

「そそ。だからボクのスキンシップも、いわばコミュニケーション！まあ、翔くんみたいな小動物系は遊ぶ分には良いとは思うけど、ボクは元来、面食いだからねえ。それ以上のコトを望んだりはいから、安心して？」

それは・・・つまり、私は標準以下に野暮つたいダサ男に見えるってことか・・・

見目で傷ついたのは一瞬。

——ああ、待て。今は不細工と思われた方が安全なんだわ。それこそ、下方評価上等ってもんよ。彼らとの付き合いはたった一ヶ月。その限られた期間内、大人しく過ごせればいい。気に入られる必要もないんだ。

「ああ・・・棕本。彼らのケー番も登録しておけ。連絡取りあえるようにしておかないと、なにかと不便だからな」
「あ、はい」

甲斐谷先輩の口添えで、私の前にそれぞれ先輩方のケー番が映し出された液晶画面が並ぶ。一つ一つ登録しながら、ふと、思った。

「そういえば・・・自分の番号は教えなくていいんですか？」

「みんな、もう知ってる。先程、きみに教えて貰った際に、俺がメーイルで回しておいた」

「ああ・・・そうなんですか・・・」

仕事が早いことで。

本来なら、勝手をされて怒って当然な場面かもしれないけど・・・今の私の立場を思えば、怒ることは躊躇われ、むしろ、それが当然みたいなにも思え・・・ なんだか複雑。

「喉が渴いたな・・・おい、オマエ。早速、役立ってもらおうか。コーヒー。砂糖1、ミルク3でヨロシク」

と、そんな私の心境を逆撫でするみたいに、注文が飛んだ。

瀬名先輩だった。

なんだ、このオレ様は・・・相沢先輩の暴挙から救い出してくれたという恩も吹っ飛ぶ位の横柄な態度に、心中、穏やかじゃなくなる。

「間取りは一緒だから、モノの場所とか、だいたい解んだろ？早くしろ」

「あ、ついでにボクらのも頼んじゃおうかな。ミルクティーお願い

ね。浅葱は日本茶だよな？」

「ええ・・・周防はどうします？」

「俺は・・・棕本の部屋で紅茶を戴いたし、そう、バラけては大変だろう。全員、コーヒーにしとけ」

「えー・・・ボク、コーヒー苦手なんだけど？浅葱だって、カフェイン駄目だしー、別々にしよう」

「おまえたち・・・」

私を氣遣つての甲斐谷先輩の言葉に、不満を洩らす相沢先輩。

・・・うん、この人は自己中・・・。

「——先輩、いいですよ。僕、別に大変じゃないですから」

それでも、従う他なくて・・・初仕事がお茶汲みって、どうなのよ？新卒のOLかってーの。

「ええと・・・瀬名先輩がコーヒーに砂糖1、ミルク3の割り合いで相沢先輩がミルクティー、皆戸先輩が日本茶・・・甲斐谷先輩はなににします？」

「・・・レモンティー・・・」

「了解。では、お台所お借りシマス」

「・・・すまんな、棕本・・・」

「いえいえ、僕の仕事ですから」

申し訳無さげな表情と声に、だいぶ救われた気がして、私は首を

振った。

まあ、親子三人暮らし。家事はそれなりにこなしていたし、お茶汲みぐらいどうってことないわけで・・。

「どうぞ」

「サーンキユ」

「有り難うございます」

「ありがとう、棕本」

注文通りの飲み物を揃え、それぞれの目の前に差し出す。

肝心のオレ様だけが、仏頂面。なんなのよ・・ありがとうすら、言ってもらえないの？

「ミルク入ってねえ・・」

「あ・・」

真っ黒い水面をジッと見つめて言われ、気づく。

つか、そんな小さなことで不貞腐れてんのか、この人は・・。

「すみません。今、持ってきます」

「・・もう、いい。解った」

「え？」

「オマエは人の注文も満足にこなせねえってことが、よく解った」

カッチーン。

上からの物言いに、なにより、勝手な尺で量られたことが癪に障った。ミルク一つで、無能呼ばわりとか、冗談じゃない。

「・・・本当にすみません。うつかりしました。今すぐお持ちしますんで、先輩は座っててください」

素早く台所の入り口に移動した私は、立ち上がった瀬名先輩の胸に手を当て、押しとどめる。

「もう、いいつつたろ？あとは自分でやる」

「それこそ今更なんで・・・一度頼んだ以上、最後までやらせるのが、頼んだ側の道理というものじゃないですか？」

「あ？ナニ、オマエ。オレに対抗してんの？十年はえーよ。座つてろ」

キツと睨まれ、身体を進めようとするオレ様。

ぐっ・・・悔しいけど、対格差で押し問答は私に不利。それでも、引く訳にはいかない。こちらにも、意地というものがある。

「先輩こそ、座ってて下さい。途中で投げ出すみたくて、気分悪いんですよ」

「オマエの気分なんか知ったことか。ペーペーのパシリ風情に反抗されて、コッチが気分悪いっつーの。イイから退け」

ぐぐぐつと力任せに身体を押し進められては、突破されるのも時間の問題で・・・あーもう、まちでム力つく！こういう時、女であることが悔やまれてならない。

「あーあ、今度は翔クンに突っかつちゃって・・・和馬、カルシウム不足なんじゃない？」

「和馬、大人げない真似をするな・・・棕本も、ムキにならずに」

仲介する声が掛かるけど、私も瀬名先輩もすでに引くに退けない領域に達していた。ほぼ、無視する形でお互いを睨みつける。

「・・・押して駄目なら、引いてみては？」

我関せずとお茶を啜りつつ、ぽつりと呟かれた皆戸先輩の声だけが、私の中でリプレイ。

押して駄目なら・・・。

胸に押し当てていた手をスツと引く。支えを失った前に出ようとする身体がどうなるかという・・・。

「なっ・・・」

完全に虚を突かれたのか、驚きの表情と共に前のめりに傾く、瀬名先輩の身体。

ふ・・・馬鹿みたいに力押ししようとするからよ。ザマアミロ。

優越感に浸ることが出来たのは一瞬。

「あ」

大きく目の前が翳る。先輩が進もうとしていた方向には、私がいて・・・当然、ぶつかり合う身体。

ドンっという衝撃と共に弾かれ、勢い余って床に倒れ込む。

うぁ・・・痛——くない？・・・あれ？

「——オマエ、バカか——！」

見れば、私の身体は瀬名先輩の上に乗ってる状態。

多分、咄嗟に身体を反転し、抱き抱えてくれたんだろう・・・ってことは、助けられたことになるんだろうか？

「言い合うだけならいい。ケド、ケガしちゃシャレになんねーだろが！程度ってモンをわきまえろ——！」

「・・・ごめんなさい・・・」

「ったく・・・」

うー・・・先輩の言う通りだ。ムキになって馬鹿なことをした・・・かも。

でも・・・でもさ・・・やっぱ、納得できないんだけど？

「やり過ぎたことは反省してますけど・・そもそもは瀬名先輩が悪いんですよね？オレ様発言にも程度つてもんがあるでしょーに。自分だって、先輩と同じ人間なんだから、格の差なんてないと思う。偉そうに命令される憶えはありません」
「っ・っ・」

あ、やば。思わず、オレ様とか言っちゃった。
視線の下で、瀬名先輩は啞然としていた。

04・その沈黙の意味は「Yes」?

「あっはっはっはっは！オレ様・和馬、オレ様だつて！！」

「くくっ・ここまではつきり言つた子、初めてですね。面白い・ははっ」

「ふっ・的は射てる。一本取られたな、和馬」

奇妙な静けさを破つたのは、盛大に上がった笑い声。

「くっ・ウルセーよ！オマエも、いつまでもオレをクッションにしてんじゃ——」

鋭い目を向けて文句を言いかけた先輩は、しかし、不自然に言葉を切り、顔を顰める。

もしかして・私を庇つた拍子にケガしたとか？

体重を掛けっぱなしだったことに気づき、先輩の身体を挟み込む形で膝を割り、中腰になった。両腕をどこか呆然とした顔の横に置き、グツと視線を近づけて覗き込む。

「瀬名先輩、どこか痛むんですか！？背中？腰？それとも・頭？大丈夫？診せて！！」

「ちょ・オマ・落ち着け。てか・顔——近づけるなっ」

なぜか、瀬名先輩は顔を赤らめ、焦った風に肩を押し戻してきた。

こっちは素直な気持ちで心配してるつてのに・・・。

「――僕が気に入らないなら気に入らないでもいいですけど、今はとにかく、ケガの具合診せて下さい。悪化して・・・入院とかになったら、どうするんですか・・・」

病院でふせつているであろう弟の姿が思い浮かび、胸が痛んだ。
自業自得ではあるし、氣力的には元気なのが幸いだけど・・・油断は大敵だ。

「うつ・・・別に気に入らねーわけじゃなくて・・・なんてか・・・」

「和馬はさー、照れてるだけだよーん」

「わぁ」

不意に背後から掛かった声とともに、両脇に第三者の手が差し込まれ、グイッと引き上げられる。

すぐに降ろされ、地に足がついたからいいようなものの、今はなんというか・・・小さい子を高い高いするみたいにな・・・。

軽く屈辱。

「あ、相沢先輩！脈絡なく、変な行動取るの止めてもらえませんか！？」

「変なつて・・・助け起こしてあげたのに、その言い草はないんじゃない？」

キツと睨みつけてみても、目の前の優男はどこ吹く風と、飄々としている。

それどころか、どことなくイヤラシい笑みを浮かべ、私を見つめた。

「見抜けなかったボクもまだ甘いつてことなんだろうけど・・・騙そうとした翔クンも人が悪いよねえ？」

は？騙す？なにを急に、言いがかり付けてんの、この人は・・・。

「ここは一つ、お仕置きするってコトで・・・いいかにゃー？」

「お、お仕置き・・・って・・・！？」

ニーツコリと妖艶な笑みを纏い、相沢先輩の手が私の顎を取る。上を向かされ・・・ちよっと待つて。この状況ってもしかしくなくて・・・。

「ちょ・・・！」

唇が触れ合う寸前に、再び、相沢先輩の身体は吹っ飛んだ。

・・・言つまでもなく、これもまた、私がやったんじゃないくて・・・。

「デメエ・・・凝りもせず、また、棕本にイカガワシイ真似しようとしてんじゃねーよ！」

暴言とともに、庇うみたいに立ちはだかつてくれたのは――瀬名先輩だった。

てか、危なっ・・・今のつて、明らかにキスされかけたのよね？なんで急に・・・私は対象外じゃなかったの？

豹変した態度に、ただただ、戸惑う。

「オイ、オマエ！コレ・・・ちゃんと掛けとけ！！」
「え？あーっ！」

乱暴に差し出された手に握られていたのは、伊達眼鏡。

相沢先輩ともみ合い、倒れ込んだ際に弾けとんだのだろう。思えばやけに、視界がクリアーだ・・・。

「ど、どうも・・・」

「・・・女みてーな面しやがって・・・反則だっつーの。身体も妙にブヨブヨしてやがるし、もちっと鍛えやがれ。一気に、調子狂ったじやねえかよ・・・」

ああ、それでオレ様の態度もおかしかったわけだ・・・。この人、女性慣れしてないんだな、きつと。

てか、それって私が悪いの？言うに事欠いて、身体ブヨブヨって・・・すっごい傷ついたかも・・・。

「ちょっと、和馬！なんて酷いこと言うのさー。翔くんは、ちつともブヨブヨじゃないよ？こういうのは、プニって言って、太ってるとは違うの！だいたい、余計な物渡さないでよ！！折角、カワイイ顔してんのに、勿体ないっ」

瀬名先輩の言葉に軽く凹んでる私は隙だらけだったのか、三度、相沢先輩の魔手に引き寄せられ、眼鏡を奪われかける。

冗談じゃない。

身体に触られただけでも危険だったのに、これ以上、素顔なんて晒した日には隠し通せるモノも通せなくなる。

家庭円満、弟の将来のためにも、こんな早々とバレて全てをご破算にするわけにはいかないのよおおおお！

「——寄るな、触るな、この・・・変態！カワイイなんて、ヤロウ同士で褒められても嬉しくないし、女みたいな面つてのも聞き捨てなりません。僕は真正正銘・・・男です。人権侵害で訴えますよ！？」

眼鏡のフレームを両手でギュツと押さえながら、身を堅くし、今や敵以外の何者でもない先輩たちを睨みつけた。

冷静に考えてみれば、年下の、しかも自分たちの手足となって働くであろう格下風情が、随分と小生意気な口を利いてると思う。もちろん、このときの私にはそんな自覚は全くなかったけど。

「・・・変態・・・」

「な・・なにが人権侵害だ！てめーの顔が女みてーなのは事実だろ！？生意気な口きいてんじゃねーよ」

「どうしてそう、瀬名先輩は上からの物言いなんですか！オレ様も大概にして下さい、気分悪いです！性格改めないと、その内、友達無くしますよ！！」

「てめーの気分なんざ、知ったこつちゃねーんだよ。口答えすんな！！」

堂々巡りとはこのこと。

「またもや剣呑な言い合いが始まり・・私も人のこと言えないけど、瀬名先輩大人げないよ？」

「へ、変態つてさ・・ちょっと人とは趣味が違うだけじゃん・・ひどいよう、翔くん。ボク、すっごい傷ついた・・これはもう、キスの一つでもしてくれないと、立ち直れない」

しかも、今度は相沢先輩の愚痴まで仲間入り。

「てか、どさくさにまぎれて、キスしろとか・・まじで危険人物だ、コイツ・・。」

「いい加減疲れて、さてどうしたものかと悩む私たちのやりとりは、やはりこの人の一喝のもと、終焉を迎える。」

「——そこまでだ。これ以上の不毛な言い合いは俺が許さん。和馬、年下相手にいちいちキレるな。朋生、趣味は自由だが、相手と回りの了承を得ることを忘れるな。二人とも、低能な真似をして・・恥を知れ」

周りを威圧する鋭い視線に制され、瀬名先輩も相沢先輩もビクツと身体を震わせ、固まった。それはまさに、へビに睨まれたカエル。ざまあみろと思う間もなく、その強い視線は私にも向けられる。

「掠本も・・・多少の理不尽はあるうが、自分から折れることが最良の選択な場合もあるだろう？年下だからと、相手が退いてくれるとは限らない。売り言葉をすべて買っていたら、トラブルを引き起こすだけで、困るのは自分だぞ。もう少し、状況を冷静に見つめる目を持って」

そう諭す甲斐谷先輩の指摘はきつと的を射ていて、私の身を案じればこそ、言い重ねてくれたのだろう。

けど・・・先輩たちより随分と多いお説教の言葉に、不公平さを感じ、なんとなく悔しく思っけて押し黙る。

だって、元はと言えば横柄な態度をとった瀬名先輩が・・・妙な趣味を前面に押し出して迫ってきた相沢先輩が、悪いんじゃない。私は被害者だ。

なのに、なんで私ばかりアレコレ言われるわけ？

「——解ったのか？掠本」
「・・・」

素直に頷くことも、返事もせず、軽くむくれて目線を逸らす。
盛大な溜息が間近で聞こえ、唐突に大きな手が両頬を包んだかと

思えば、グイツと力任せに顔の向きを変えられた。

端正な黒髪が先輩たちを射抜いた時と同様・・・いや、それ以上に鋭い眼光で私を見据える。

「沈黙は了承と取るが、いいな？」

「・・・一応は、肝に命じておきます。でも、自分の始末ぐらい、自分でつけれますし、甲斐谷先輩には迷惑かけませんから、安心して下さい」

見下ろす視線に怯む事なくきつちりと見返して言う。

ちよっぴり可愛げがない気がしないでもないけど、元来、私は負けん気が強い。睨みを利かせて、上からの物言いなんかに大人しく屈するはずもない。

「きみ・・・」

と、見つめる先の表情が一変して驚きのそれへと変わった。周りも少しざわついているような・・・一体、なんなの？

「俺が怖くない、のか？」

「は？」

少しの間を置き、甲斐谷先輩にそう訊ねられ、ぽかーんとしてしまった。

怖い？

なんで？

・上級生だからって、怖がらなきゃいけない道理なんてないと思うけど・・・。

「・・・別に、全然恐くないですけど・・・怖がるべき、でした？」

返事に困りつつ、大真面目にそう訊ね返してみる。
瞬間、水を打ったような静けさに包まれ・・・そして・・・。

「・・・・・・・・くっ・・・ははっ・・・はははっ！」

目の前の生真面目な彼は、さもおかしいという風に大笑いを始め、表情を崩したのだった。

これで啞然としない人がいたら、私は拍手でその鋼鉄の精神力を褒め称えたい。

更に、時間が経つごとに、頭の中？マークでいっぱいな私を笑う声は、つられるみたいに増えた。

「ふふ・・・本当、面白い方ですね・・・ふふふ・・・」

「はー・・・翔くんって・・・うん・・・びつくり・・・あはっ・・・ははっ
「おまつ・・・あーもー・・・くくっ・・・スゲーな？」

口々に笑いを漏らしながら言われ、疑問符の数はますます増える。
なんなのよ、もう・・・男心は解らん・・・。

ともあれ、私はどうやらこの見目整った、けれど一癖も二癖もある厄介な先輩方に気に入られたらしい。

05・今日は離れてやらない

波乱の顔合わせタイムが終わり、疲れ切った足取りで自室へ辿り着くと、すでに空夜も戻って来ていた。

私の気配に気づき、顔を上げる。

「あ・・・おかえり、翔」

「ただいま、空・・・夜!？」

視線の先にあるものを見て、私の語尾は跳ね上がった。
ずかずかと部屋の中を闊歩し、彼の手にあるブツを取り上げる。

「ちょ・・・な、なに見てんの!」

「ええやんか、減るもんやないし。ちゅうか、ソックリやな・・・翔くん、双子やったんやね?」

「っ・・・あ・・・う、うん・・・」

空夜が見ていたのは、私と弟のツーショット写真だ。お守り代わりに持って来たそれには、本物の翔と、女の格好をした髪の長い私が写っている。

こうやって見ると、私も捨てたもんじゃないよなあ?
思わず、第三者の——男の目になって己の姿を見つめ、ハツとなる。

ああ・・・何が悲しくって男の立場から自分を褒めてんだか・・・、感化されてしまった思考に、顔を歪んだ。

「んで、これは妹さん？」

「・・・いや、一応、姉。先に生まれたから・・・って、ジロジロ見るなっ・・・あっ！」

「ほー、姉ちゃんか」

凝りもせず、ひよっこり覗き込んできた上、写真を取り上げた空夜は私の手の届かない頭上にそれを掲げ、しげしげと眺めた。

私と翔はお互い、本当によく似ている。パツと見で見分けられる人は、ほぼいないだろう。

それでも・・・なんていうか、男の姿をしている今、女の自分を見られるのは、どこか気恥ずかしかった。

「・・・名前、なんて言うのん？」

「そ、そんなん・・・どうだっていいだろ。か、返せつてば！」

「んー・・・教えてくれたら、返してやつてもええよー」

くっ・・・このお。人の足下見て！

懸命に手を伸ばし、奪い返そうと試みるものの、私の手は虚しく空を切るばかり。

そうこうしている間にも、空夜はジツと穴が空くのではないかと思うほどに写真を見つめ続け、ついには、私とその写真とを交互に見比べ始める。

「・・・翔くんが髪長うして、スカート履いたら、きつとこんな感じ

なんやるな。んで、この娘が髪短うして、ズボン履いたら――」

「っ・・・翼っ！」

「つばさ？」

「そう。わた・・・姉の名前は、翼だよ・・・」

「ほー、翼ちゃんか。・・・うん、ええ名前や」

「・・・どうも・・・てか、これで満足したでしょ？返してよ！」

少しだけ掲げられた腕の高度が下がったのを見計らい、ジャンプして彼の手から写真をむしり取った・・・はずが、またもや空を切る結果で終わってしまう。

人の悪い所行に、私の堪忍袋の緒はキレた。

「空夜！いい加減に・・・」

「なあ・・・これ、くれへん？」

「は・・・あ！？」

「ええやん。姉ちゃんとの写真やなんて、実家帰ればいっぱいあるんやろ。この写真、おれに頂戴？」

ニッコリ笑顔で強請る空夜の意図が、全く読めない。

なぜ、他人である姉弟の写真などが欲しいというのか・・・。

「ほら、男子校やなんて、潤いあらへんやろ？目の保養に、な」

潤い・・・どういう意味だろ。

仲睦まじい姉弟の様は、そんなにも心温まるものなのだろうか。

でも、やっぱり・・・。

「――駄目。それはここに居る間の僕のお守りだから、上げられない。返してください」

一ヶ月とはいえ、決して知られてはならない秘密を持ち、男として演技し続けることは精神的に相当な負担だ。

それも弟の将来のためだと思うからこそ、頑張れる。

確かに空夜の言うように、家に帰れば写真はいつぱいあるけれど、今、ここにあるのはこの一枚だけ。くじけそうになった時の心の支えを、そう簡単には失えない。

真剣さが伝わったのか、掲げていた彼の腕が私の手の届く距離にまで降り、写真を差し出される。

「そない大事にしとるなら、仕方あらへんな。諦めるわ」

「うん、ありがと」

「――ただし」

「ん？」

「ほなら、翼ちゃんのこと、もっと詳しく教えて？」

お互いの手が写真を掴んだ状態で、空夜が付け加えた。
私のことを詳しくって・・・。

「・・・な、なんで？」

「無粋やね、そんなん、決まってるやないか」

戸惑う私に、彼は少し悪戯っぽく目を細め、言った。

「おれ、翼ちゃんが気に入ってん」

「え・・そ、それって、もしかして・・」

「うん、一目惚れした」

女の身で聞いたなら少しは嬉しいその告白は、今の私にとって、新たな弊害になりうる厄介な要素でしかない。

替え玉作戦は当初の予想を遥かに超え、難易度の高いものになりそうだ。

頭が痛い・・私、無事にやり遂げられるか自信無いよ、翔・・。

思わず、当人である弟に弱音を吐いた瞬間、胸ポケットの中の携帯が鳴った。半ば強引に写真を取り戻し、意気消沈気味にノロノロと携帯を取り出す。

「・・はい、棕本ですが・・」

『翼？僕だけど・・無事！？今、母さんから事情聞いて――』
「っ・・かけ・・！」

切羽詰まった聞き覚えのある声、なにより、そのヤバい呼び方に慌てて電話口をギュッと抑えた。

恐る恐る彼を伺い見、顔が引き攣る。ものすごい近い距離にある顔が、疑わし気な視線を私に向けていた。

「な、なに？」

「翼ちゃんの名前聞こえた気するんやけど・・・誰？」

ちっ・・・人の電話を盗み聞きするもんじゃないわよ。

『え・・・男？まさか・・・寮って個室じゃないの？』

「なあ、電話、誰からなん？男みたいやけど・・・」

『どういつことさ！そんなの・・・危険過ぎだろっ。ナニ考えてんの！？』

「なあ、誰？なあ・・・なあて」

あーもう・・・。

矢継ぎ早に両方から問いつめられ、私の我慢は限界に達する。

「うつさい！いっぺんにゴチャゴチャ言われても、こっちは一人なの！！順番に答えるから、少し待ちなさいっ！！！」

鋭い一喝に制され、男たちは沈黙した。

そうよ。聖人君子じゃあるまいし、いっぺんに両方を相手になんかできないっつーの。

「空夜。相手は・・・昔馴染みの親友からだよ。電話代掛かるから、まず先にこっち処理する。いいよね？」

「・・・おう」

「あ、盗み聞きなんて質の悪い真似したら、友達辞めるから。つか、プライバシー侵害で訴える！ってことで、聞こえない距離まで、はい、下がって下がって」

「・・・解った。大人しゅうしとったらええんやろ・・・」

「うんうん、大人しゅうしとってください」

面食らって押し黙ってる彼を軽く睨んで牽制し、私はそう言い渡して距離を取った。

視線を外さないまま、再び、電話口に話しかける。

「もしもし？かけ——あんだ、大丈夫なの？怪我の具合は？」

『怪我は・・・まあ、骨折ってるわけだし、すぐに治るはずもないけど。って、僕のことはどうでもいいんだよ。翼、なんで替え玉なんて・・・そこがどういふとこか解ってんの？』

「・・・解ってるよ。男子校でしょ」

『そう！男子校！！男しくないんだよ！？僕に成り済まして飛び込むなんて、無謀過ぎ！バレたらどうするの？どんな目に遭うか・・・助けなんて期待できないだろ！今すぐ、家に帰れ！！』

「翔・・・」

弟の言葉全ては的を射ていて、現実起こりうる恐れのある危険けど、ここで逃げ帰ったら、全ては水の泡。

「でも、そんなことしたら、入学取消されちゃうよ。折角、こんないいところに推薦で入れたつてのに、勿体ない。入りたかったんですよ？すっごい、喜んでたじゃん」

『それは・・・けど・・・翼だって学校あるのに・・・初っぱな休んでたら、後々大変になるだろ？なにより・・・僕のせいで翼を危険な目に遭わせるの、嫌だ・・・』

私の身を案じる気遣いと、申し訳なさが滲んだそれに、顔が綻ぶ。双子なせいもあって、翔と私はとても仲がいい。お互いを想い合う姉弟としての絆は、濃い血の繋がりを感ずる。だからこそ、ここは退けない。

「私だって、翔が学校通えないなんて嫌だよ。だから、力になれることはなりたい。一ヶ月の辛抱だし、大丈夫だよ」

『翼・・・』

「それにさ、私、結構、演技うまいかも。早速、先輩方に気に入られちゃったよ。あと、学校には変わりないから、勉強面で出遅れることないし・・・うん。思ったほど、深刻な問題じゃないわ」

努めて明るく言い、弟の不安要素を取り除いてゆくと同時に、自分にも言い聞かせる。

うん、大丈夫。大丈夫だよな。

「翔は身体を治すことだけ考えな。ね？早く治れば、私の替え玉期間も短くなるんだから、心配なら死ぬ気で治しなさい」
『・・・・・・・・・・・・・・・・わかった』

長い長い沈黙の後、ようやく、翔は折れた。

『でも・・・無理すんなよな?』

「うん、ありがと」

『また連絡するから』

「あー・・・できれば、メールにして。電話だと・・・ちよい同室の子が厄介。あと名前も別のに・・・翼って呼ばないでね」

一定の距離を保っていた空夜が痺れを切らしたのか、仕切りに電話を切れとジェスチャーしてくる。

これ以上長引けば、言いつけを無視して傍に寄り、聞き耳を立てそんな勢いだ。ごく身時かな危険分子から秘密を護るためにも、電話は戴けない。

『・・・わかった。そいつ、くれぐれも気をつけろよ』

「はいはい。それじゃ、切るね。お大事に」

名残惜しく思いながらも、私は電話を切った。

はあ・・・とりあえず、身内の問題は片付いたとして・・・

「話、終わったみたいやね? ほな、今度はおれの番や。翼ちゃんのこと、色々教えて?」

不敵に笑む表情に、翔以上の手強さを感じ、溜息が出た。
彼が知りたがっているのが・・・女としての私のことだなんて、話

し難いに決まってる。

なんとかうまく誤摩化して、話を反らせないものだろうか・・興味を削ぐ手段がないものか・・打開策を考えてみるものの、良い案は浮かばない。

色々って・・言いたくない、で、大人しく引き下がってはくれないよね。どうすっかなあ・・。

ちらりと時計に目をやれば、もうすぐ七時。夕食の時間。

「と、とりあえず・・そろそろ夕食だし、話は食べてからってことで。食堂行こうよ、空夜」

「ん・・そういや、腹減ったなあ。喰いっぱくれるのんもあれやし、まずは腹ごなししか」

ごく単純にしてシンプルな誘い文句に、驚くほどあっさり、目の前の男が乗ってくれる。

空夜って・・案外簡単かも・・？

良い意味で裏切られた自分の読みに、ホッとしたのも束の間。

「腹いっぱいになったら、とことんおれと翼ちゃんトークやね。ちゃんと全部の質問に答え終わらへん限り、今日は離れてやらへんからそのつもりで」

より一層の不敵さを滲ませた彼は、力強く私の肩を掴み、ニッコリと笑ったのだった。

恋する乙女のパワーも相当なものだけど、一目惚れした男の執着はそれ以上だということを、私は思い知ることになる。

夕食後、部屋に戻り帰って早々、宣言通り、質問攻めに合い・・眠気に襲われながらも誤摩化し誤摩化し答えて・・答えて・・いつの間にか、私は眠ってしまった。

「・・・なっ・・・」

目覚めて、自分の身の様を目の当たりに、絶句してしまう。

なにがどうしてそうなったのかはわからないけれど、胸を押しつぶしていたサラシが解かれていて、本来備え持った女性特有の膨らみを枕に、空夜が私の上で寝ていた。

06・言葉にしないけど分かってよ

「・・・・・・・・」

落ち着け、とにかく、落ち着こう。

昨晩は・・・えーと・・・そう、ずっと空夜との押し問答が続いて、いい加減眠くなって切り上げようと提案したけど聞き入れてくれなかったんだよね。

せめて一息吐かせて欲しいと珈琲を入れて・・・ああ、そうか。

「この・・・酔っぱらいが・・・」

世の中にはカフェインで酔ってしまう特異体質な人がいると噂には聞いていたけど、よもや目の前の男がそれに属するとは・・・。

そう、珈琲を飲んだ空夜は徐々に呂律が回らなくなって、目が据わっていった挙げ句、私に詰め寄った状態で寝入ってしまったのだ。なんども手を振りほどこうとしたものの、どんな馬鹿力で掴んでるんだか、どうしても解けず、疲れ切って私も寝ちゃった、と。

だからって、なんでサラシが・・・その謎もすぐに解明されることになる。

他でもなく、私自身が体感して！

「ひい！・・・っ・・・う、くっ・・・」

おもむろに、胸をギュツと鷲掴みにされ、出掛かった悲鳴をなんとか両手で口を抑えて押し殺した。

悲鳴の元凶は、言うまでもなく、私の胸を枕に眠る手癖の悪い酔っぱらいこと、空夜。

寝ぼけているのか、決して、気軽に触れていい場所ではないそこ・乙女の柔肌に無遠慮にも頬擦りまでしてくる始末。

ぞわぞわと背中走る悪寒に耐えながら、空夜の動向を伺い、ジツと顔を見つめた。

憎らしいほど安らかな表情。

柔らかい茶髪が身じろぎする度、くすぐったく素肌を撫で、触れる頬は人肌の温もりを伝えてくる。

うつすらと開いた唇が、胸の真ん中を捕らえて――。

「つつつつ!! やつ!!!!!!」

「な・・あ、あつ!？」

限界だった。

私は短く悲鳴を上げると、空夜の身体をありったけの力で盛大に突き飛ばし、真っ直ぐにバスルームへと向かう。

内鍵が付いてたのは不幸中の幸いかもしれない・・。

「つてえ・・一体、なん・・翔?なんでおれ、突き飛ばされてん・・

」

手痛い目に遭い、しっかり目を覚ましたらしい空夜が向こう側で騒いでいるけど、んなことは些細だったの。

自分の胸元に視線を落とし、紅く色付いてその存在を誇張するモノに、激しい怒りを覚える。

なんてヤツだ・・・最悪だよ、もう！

「なあ、どういうこと？ちゅうか、ここ、開けえや」

「・・・嫌です。どういふことなんて、自分で考える！その胸に手をあてて、よおおく思い出してみなさい」

「・・・なんや怒つとるのは、よう解った。思い出す？うーん・・・」

普通に考えて、無意識の行動を責めるのは酷なこと。
それでも、彼が私に働いた狼藉は、我慢出来るレベルを超えていた。

「・・・とにかく、僕はお風呂に入ります。無理に開けて入ってこようものなら・・・」

「ものなら？」

「クロス。まぢ、クロス。全力でクロス。跡形もなくクロス。末代までコロシマス」

呪文の様にその物騒な単語を連呼する。

私の怒りが尋常でないことが伝わったのだろう。

「・・・了解」

短く言い、空夜はそれ以上の詮索を辞め、引き下がった。
気配が遠ざかり、私は男の園とやらに来て初めての入浴タイムを
迎えたのだった。

とりあえず・・・落ち着いた。

昨日の垢を綺麗サツパリ洗い流して、文字通り頭を冷やすことが
出来て改めて、自分の行動の危うさを後悔する。

空夜の意識がはつきりしている横で、お風呂に入るなんて・・・我
ながら馬鹿だ。踏み込まれたら、誤摩化しが効かない。

もっと冷静に、もっと慎重に、そしてもっと・・・狡猾になって、
全てを欺かなければ。

さて、そうになると、まずは最も身近な存在である空夜をどうにか
しないといけないのよね・・・。

髪を乾かしながら、自分に有利な環境にすべく、知恵を絞る。

それにしても・・・着替えを隠し置いといて良かった・・・備えあれ
ば憂い無し。

すっかり“翔”の姿に戻ったところで、私はバスルームの鍵を外
し、部屋へと舞い戻った。

ソファに腰掛け、項垂れてた空夜が顔を上げる。

「・・・翔、すまんかった・・・」

開口一番、手を合わせて謝られ、多少、身構えてしまう。

自分の非を認めるに等しい謝罪は、彼がしたことを思い出したか
らに他ならず、それはそれでゆゆしき事態だ。

「・・・思い出した？」

「うん・・・今更やけど、おれ、カフェイン駄目なんや。身体が受け付けへんで、酔っぱらったみたいになつてまうねん」

「・・・ホント、今更だよ」

「すまん。それで・・・えーと、あの手の感覚・・・夢やないよな？俺が、翔の大事なトコ、触つてもうたんやろ・・・？」

「っ・・・」

やはり、バレちゃったんだ・・・。

そうだよな、あんだけはつきり胸触つて、キスマークまでつけて、バレない方がおかしいもの。

大きく深呼吸し、覚悟を決める。

こうなつては、もう、全てを打ち明けて、協力を仰ぐしか道はない。

「・・・いや、騙してた私も悪いから。でも、これには理由があつて・・・翔、怪我して入院してるの」

「・・・ん」

「推薦で入つてる身だし、初っぱなで何ヶ月も休んだりしたら、学校に貢献無しつてことで入学取消されちゃうでしょ？」

「ええと・・・」

「だから、私が替え玉をして、どうにかそれは阻止しようつて話に

――」

「・・・あの・・・ちよーっと待った。待ってくれ・・・」

「え？」

いざ、頼み込もうというところで、激しく制止された。無理矢理の中断は、引き受ける気はないという意思表示？

だとすると、とても厄介だなあ。さて、どうしてくれよう・・・。

「おれは・・・てっきり、翔の・・・その、股間のモノをギニューってしてもうたんやと思うとったんやけど・・・」

「は？股間の・・・モノって・・・」

戸惑い気味な告白を受け、彼の指すモノが何かをノロノロと思い浮かべて・・・一気に血の気が退く。

空夜の言うモノと、私が言うモノは確かに、それぞれにとっては特有の、大事なモノ。

「今の翔の話やと、別のモンっちゅうことやよな？それも・・・普通、男には無いモノや」

ただし、男女という性別的な差があり、同一ではなかった。

つまり・・・私が女であることは、まだ、バレていなかったのだ。

「もしかせえへんでも、きみ、翔やのうて・・・翼ちゃん・・・？」
「・・・・・・・・」

他でもなく、私自身がバラすまでは。

ああああ、私の馬鹿——っ！なんて間抜けな告白を・・・。

——いや、待て。諦めるのは早い。冗談つてことで、まだ、誤摩化しが効くかも！

「い、今のは冗談——」

「——で、誤摩化そ思うつるんやったら、今、この場で裸に剥いたるけど？」

「・・・思ってないから、絶対、やめて」

人の悪い笑みを浮かべて見下ろす顔を、私は軽く睨んだ。

が、全く怯む様子なく、更に嬉しそうにニコニコと笑われてしまふ。

「男にしては線細すぎやと思うとったら・・・そういう事情やったんやね。いやあ、驚いたわ・・・それ以上に、本物の翼ちゃんにこうして逢えるやなんて、嬉しいなあ」

そういえば・・・空夜、写真の私に一目惚れしたんだっけ・・・。
ジッと顔を見つめる。

と、バツが悪そうに視線を外し、困ったように首の裏を掻く彼。

「・・・すまん。不可抗力とはいえ、不躰に女の子の身体触ってもうて・・・」

改めての謝罪に、私の中で、ある算段がフル回転で組み上がる。
バレてしまった以上、彼に私への想いと罪悪感があることを利用
しない手はない。

「・・・あんなことされるなんて・・・私・・・初めてだったのに・・・」
「え・・・ちよつ、と、おれ・・・胸触る以外にも、なにか・・・した？」
「覚えてないの？・・・ひどいよ、空夜・・・」
「ええっ・・・？まさか・・・最後まで？い、いや・・・それはあらへん
よな。そないなことしたんやったら、さすがに覚えとるはずやし・・・
なにより・・・」
「っ・・・だ、だったら、コレはどう説明するつもり？」

胸元を押し広げ、紅い痕跡を見せつける。

「ソレ・・・おれが？」
「・・・他に誰が付けるっての？昨日の質問にもあつた通り、私、男
の子と付き合つたこととかないんだけど・・・」
「・・・せやつたな。・・・他には・・・ない？」
「他？」
「うん。身体辛いとか・・・痛いとか？」
「あ、ああ・・・他は・・・まあ、大丈夫、かな・・・」
「そつか・・・」

難しい表情、真摯な瞳で見つめられ、不覚にもドキツとしてしま
う。

もちろん、胸を触つたのとキスマークを付けられた以上の色濃い

事実はなく、泥酔状態で記憶がないのをいいことに、私が吹聴してる嘘だった。

欺いているという罪悪感からか、真っ直ぐに空夜の顔を見ることができなくなり、視線を外し気味に、言葉を繋げる。

「そ、それで・・・ちゃんと、責任とってくれるんだよね？」

「ん・・・」

「その・・・空夜は、翼が・・・私が好き、でしょう？」

「・・・うん、力になるよ」

うつすらと微笑み、大きく頷く彼。

よしよし。状況は私にとても有利だ。

「それじゃ・・・まず、ここでのルールを決めよう」

「ルール？」

「空夜は男で、私は女なわけだから、一緒の部屋で生活するには色々と問題あるでしょ？例え、それが替え玉してる間だけと言ってもさ」

「おれは・・・別にこだわりあらへんし、君の過ごし易い風に決めてええよ」

今や完全に主導権を握った感。

なあんだ・・・こんなやり易くなるなら、最初から替え玉だってバラして、味方につけておいても良かったなあ。

呑気にそんなことを思っていたら、突然、手を握られる。少し驚いて、ビクンと身体を震わせてしまい、空夜が苦く笑った。

「取って喰うたりせえへんよ。一つだけ、俺から頼みがあるんやけど、聞いてくれる？」

「な、内容によると思うけど・・・なに？」

「二人で居る時だけで構へんから・・・翼って呼んでもええやるか」

「なんだ・・・そんなことか。いいよ、名前ぐらい」

「・・・おおきに」

複雑そうな彼の笑みに、私は気づかない。

とにかく、翔の替え玉生活を成功させることだけに必死で、その全てが空夜を酷く傷つける算段なのだとは考えもしなかった。

「・・・翼、今はあえて言葉にせえへんけど・・・分かっとなるんよね？」

「?・・・うん」

そして、その真意を推し量ることすらせず、彼の言葉を軽く聞き流してしまったことを、後々、後悔しようとは・・・。

私は救い様がないほどに浅はかだったのだ。

07・ただ声が聞きたいだけ

それから三日経ち、五日経ち、七日、十日と・・・替え玉生活は問題なく過ぎてゆく。

男ばかりの中、たった独りきりでのことだったら、だいぶ精神的に参ってしまうところだけど、私には心強い協力者・空夜がいた。

あの夜、酔った勢いで私にいかがわしい真似を働いたと思っている彼は、力になるとの言葉通り、常に私の傍に居て、色々とフオロ―してくれている。

もともと気さくで、人懐っこい雰囲気があっただけに、秘密がバレてしまった開放感からか、お互いに色々なことを遠慮なく話す仲になっていた。

午後の授業が終わり、帰り支度を始めていると、早速、空夜が私の元へやって来る。

「今日も一日お疲れさん」

「お疲れさま、空夜」

私の複雑な事情が露見して以来、端から見てもそのツーショットっぷりはあからさまで・・・お昼も一緒、登下校も一緒、寮でも一緒・・・と、変な意味で仲を疑われてしまうほどだ。

まあ、それはそれで、他の男子生徒と必要以上の付き合いが少なくなれば、コトがバレる危険性も減るし、今の私には好都合。

本物の翔には不名誉な疑惑になっちゃうけど、それぐらい勘弁してくれるよね。

「んじゃ、帰ろっかー」

促す私を苦く見つめる彼。

「すまへんけど、今日は一人で帰ってくれる？おれ、ちょっと人と逢う約束あつてん」

「あ、そうなんだ。うん、分かった。先に帰ってるね」

「・・・帰り気をつけてな。知らへん人に声掛けられても、ついて行ったらあかんで？」

「ぶっ・・・なにそれ。小学生じゃあるまいし、ないって。大丈夫だよー」

あまりの過保護に吹き出し、笑いながら手をヒラヒラさせた。けど、空夜はどこまでも真剣だ。顔をぐつと近い距離に寄せ、声を潜めて言う。

「そう思うとるのは翼だけやって・・・実際、不穏な空気が・・・」

「不穏な空気？」

「——いや、こっちの話。とにかく、真っ直ぐ寮に帰るんや。ええな？」

「うん。どのみち、相沢先輩にお使い頼まれてるから、それだけ済ませて、すぐ帰るよ」

「相沢先輩？・・・それはそれで・・・」

眉間に皺を寄せ、更に難しい表情をする彼の胸中を察し、苦笑う。

うん、気持ちは分かる。私も、相沢先輩とピンで逢うなら断つてるところだ。

「大丈夫。相沢先輩の用事をこなすときは、瀬名先輩に同席してもらう約束になってるから」

「そうか・・・念のため、着いたら携帯に電話して？」

「心配性だなあ。寮なんて、学校の眼と鼻の先じゃん」

「女の子の身を案じるのんは、男の務めやし・・・ま、ただ声聞いて、安心したいだけなんやけどな。あ・・・ほな、行くわ。時間厳守せな、うるさい人やねん・・・」

「行つてらっしゃい。また寮でね」

「・・・うん、行つてきます」

につこり極上の笑みを浮かべた彼と、手を振り合つて別れ、学校を後にする。

携帯を操作し、相沢先輩からのお使いメールを確認しながら、店へと向かった。

「えーと・・・これとこれと・・・うへ、こんなものまで？」

目的の男性用化粧品を買い物がごに放り込みながら、軽く呆れてしまう。さすが相沢先輩と言うべきか、それらはメーカーまでも細かく指定されていた。

しかも、どれも結構な値段・・・お金、先に預かってるからいいけどさー。

ふと、同じ年頃の女子高生たちが、黄色い声を上げながら化粧品を選んでいるのが目に留まる。

翻る丈の短いプリーツスカート、可愛いブレザーの制服・・・いいなあ。本当なら、私もああいう輪に加われるはずなのに・・・。

しげしげと眺めて羨んでみても虚しいだけ。あ、あのリップ、いい色・・・。

「・・・」

無性に女の部分が疼いて、気がつけば、相沢先輩に頼まれた物と一緒にリップを購入していた。付ける機会なんて、当然、先になることだろう。

「まあ・・・いいか。お役御免になる日まで、大切にしまっておこう・・・」

「棕本翔くん」

「っ!？」

唐突に、背後から名前を呼ばれ、慌ててリップを鞆の中にしまった。

振り向いて見れば、同じ学校の制服を着た男子生徒が、真っ直ぐに私を見つめている。

うあ・・・まさか、リップ買っていると見られた? いや、でも、男性用化粧品のが比率圧倒的だったし、最悪、誰かへのプレゼントっ

て言い訳はできるかな・・・。

「そ、そうですね・・・どなた、ですか？」

グリーンのネクタイをしているってことは、三年生だろう。
だが、全く見覚えがない先輩だ。

「甲斐谷の使いの者だけど・・・なんか、頼みたいことがあるから、
大至急、呼んできてくれってさ」

「え・・・甲斐谷先輩が・・・僕に頼み？」

珍しいこともあるものだ。顔合わせの席以来、甲斐谷先輩が私に
個人的な用を言いつけることはなかったのに。

それは遠慮なのか、単に私では役立つことがないのかは分からないが・・・
そんな前提があったため、率直に驚くと同時に、少しだけ
頼られたことが嬉しいと思えた。

「そうですね。わざわざすみません」

「あ・・・そっぢゃなくて、こっちな」

「ん・・・」

軽く頭を下げ、学校へ戻ろうとしたところ、不躰に手首を掴まれ
る。

そのままグイッと引かれ、どんどん学校から離れて進み・・・一軒

のカラオケ店の前で歩みは止まった。

「・・・ここですか？」

「うん」

甲斐谷先輩がカラオケ店？なんか、すごい不似合いなんだけど・

訝しく思ったものの、手首の束縛は緩むことなく、彼の意のままに店内へと入るしかなかった。耳に五月蠅いくらいの音楽が響き、幾つかの部屋を素通りして、一番奥の部屋のドアが開かれる。

やはりグツと力のままに手を引かれて中へと入り、私の背後に回った彼がドアを閉めた。

しかし、部屋の中に甲斐谷先輩の姿はない。

「来た来た」

「こんにちわ、棕本くん」

代わりに居たのは、同じくグリーンのネクタイをした三年生らしき男子生徒二人。

どうしたんだろう・・・甲斐谷先輩、まだ来てないのかな？

「あ・・・甲斐谷先輩は・・・？」

「ごめん、甲斐谷が呼んでるっていうのは嘘」

「は？」

「俺たちが、個人的に逢いたくて呼んだの」

それって・・・。

サツと血の気が退く。この状況って、もしかしてかなりヤバいんじゃない・・・。

「・・・そういうことなら、僕、帰ります」

「まあまあ、そう言わずに」

「俺らはただ、掠本くと仲良くしたいだけなんだよ?」

「そーそー。四天王のお気に入りが、どれほどの者が興味があつてさー」

四天王って・・・もしかしくなくても、甲斐谷先輩たちのことだろう。見た目もあれだけど、個々の能力がかなり高いらしく、特別視されているのは知っていた。

実際、それぞれ、生徒会を構成する重要なポストに就いているようだ。

そういう意味で彼らは多くの生徒に一目も二目も置かれるほどの存在であると同時に、敵視されることも多い。付け込める隙を常に伺われている状態。

でもなあ・・・。

「あの一、期待を裏切るようなんですけど、僕じゃ先輩達の弱みにはならないですよ?ただの使いっパシリですし・・・」

「だからこそだよ。パシリってことは、プライベートなこと頼まれたりもするんだろ?なんかね一の、巷に出てない情報とか」

巷に出てない情報ねえ・・・私が知ってることと言えば・・・

「・・・甲斐谷先輩はレモンティが好き？」

「あ？」

「皆戸先輩はカフェインが駄目で緑茶、相沢先輩はミルクティ、瀬名先輩はミルクコーヒーが好き」

「・・・」

「甲斐谷先輩と皆戸先輩は和菓子派、相沢先輩は洋菓子、瀬名先輩は甘いもの苦手でしょ、あとは——」

「・・・もついい」

三人のどこか冷たい視線が突き刺さる。

その顔にははつきりとした落胆の色が見えて、期待はずれと書いてあった。

「なんだよ・・・お気に入りだって聞いたから期待してたのに、なんの役にも立たねーな」

だから言っただじゃん・・・ただのパシリなんだって。あまりに身勝手な言い草に、こちらの方がそが気分悪くなる。

「・・・用事、済みましたよね？んじゃ、今度こそ僕、帰りますんで失礼します」

不機嫌に、それでも最低限の礼儀を持ってそう言い、軽く会釈して去ろうとするも、背後の先輩に両肩を掴まれ、それ以上の身動きが取れなかった。

「あの・・・？」

「まあ、折角だし、少し俺らに付き合つてよ」

「は？でも・・・僕、役立たずだし、これ以上付き合つても得るなんて・・・うわ」

言い終わらない内に肩を強く押され、前のめりにソファーへと倒れ込んでしまう。

いきなりなにをするのよ・・・この男は。

キツと睨みつけると、値踏みするみたいな視線とぶつかる。

「ふーん・・・こうやって見ると、本当に女の子みたいだな」

「小さくて、細くて」

「器量もなかなか・・・」

雲行きが怪しくなったきた。

一刻も早く、この場から逃れないと・・・本能からの警告に従い、彼らを睨みながら姿勢を正す。

「それ、よく言われるんですけど・・・僕はれっきとした男です。相沢先輩じゃあるまいし、そういう趣味とかないでしょ？もういいで

すか・・・お使い頼まれてるんです。早く寮に戻らないと・・・」

「相沢か。アイツ、そういや、そうだったな・・・」

「俺らは一応、ノーマルだし、そういう趣味ねえけど・・・」

「確か、棕本クンは奴らの使いつぱなんだよな。そういうことのリクにも応えてるワケ？」

言葉の意味するコトを理解し、カッと血が上る。

「僕は・・・僕はそんなことに応えてない！相沢先輩だって、趣味はともかく・・・少なくともこんな卑怯な真似はしないよ。そういう意味では、彼の方がよっぽどマトモだ！」

言った瞬間、場の空気が変わった。

「言ってくれるね・・・」

「マトモじゃない卑怯者だってんなら」

「いっそ、そーゆーコト経験してみんのも、おもしれえかもな？」

火に油を注ぐとはこのことだろう。

下卑た笑みを浮かべ、包囲網が縮まり・・・ハッと気づいて行動に移るけど、一瞬、遅い。

戸口へと駆け出したところ、肩を掴まれ、なんとか二の足を踏ん張って耐えようとするも、右足首が嫌な音を立てただけで、無駄な抵抗に終わる。

そのまま力任せに床に引きづり倒され、強く背中を打ち、息が詰

まった。

「っ！・・・ごぼっ、げぼっ・・・うう・・・」

「大人しくすれば、手痛い真似は・・・ああ、ちつと痛いかも？」

苦しさに涙が滲んだ視界の向こう側で、私の上に乗り上げた一人が淫猥に嗤う。

「へえ・・・やっぱ、可愛い顔してんだな。これなら、その気になれそー」

眼鏡を外され、間近から見つめて来る目に、嫌悪感が沸いた。

「・・・馬鹿な真似はやめて・・・今なら、黙っててあげます。これ以上先は・・・誰かに気づかれたら、言い逃れできませんよ？」

「こんな騒がしい場所で、まして個室じゃ、誰も来やしない」

「邪魔は入らないさ。残念ながら・・・ね」

冗談じゃない・・・秘密がバレるのも困るけど、それ以上に、私が女だと分かっただらそれこそ・・・どちらにしても貞操の危機だ。

「は、はなせっ・・・うく・・・！」

バシッと頬を叩かれ、ジンとした痛みが広がる。

「しーっ・・・騒ぐなって。大人しくって言っただろ？」

二人が両腕を押さえつけ、一人が身体の上に乗って、身じろぎしても微動だにしない。女の力ではどう足掻いても好転しそうにない現状。

「ごめん、翔・・・もう、学校行けなくなるかも。」

乱暴にネクタイが解かれ、シャツの裾が引き抜かれる。ズボンのベルトに手が掛かって・・・もう、駄目だ。絶望感が広がった。

・・・やだ、こんなの、やだよ・・・誰か・・・。

浮かんだ顔に、ひどく後悔する。あれほど念押しされ、注意を受けたというのに、見知らぬ先輩にノコノコについていった私は、本当に馬鹿だ。

「・・・助けて・・・空夜・・・」

悲しくて悔しくて、じわじわと涙が視界を揺らす。

不躰な手がシャツを割って入り、素肌に触れようという刹那、バンっという大きな音とともに、乱暴に扉が開いた。

「・・・貴様ら、なにしとんねん!!」

押し殺した低い声は、馴染み深い、聞き覚えのあるもの。
鬼の形相で肩を怒らせ、拳を震わせた空夜が――戸口に立っ
てい
た。

08・泣く一步手前の顔をしてるのに

「・・・今すぐ、翔の上から退け・・・」

「おまえ・・・一年の小笠原、か」

予想外の闖入者に、私も含め、呆然となる先輩たち。

そんな心中など完全に無視といった風体で、空夜は更に警告する。

「聞こえへんかったんか？御託はええから、早う、退けや・・・」

「――足腰立たなくされなくなければ、言う通りにすることだ」

「最も・・・君たちをこのまま放つてはおけませんけどね？」

後押しするみたいな声の主は、甲斐谷先輩と皆戸先輩のもの。

「妙な引き合いに出されたときはどうしようかと思っただけど・・・やっぱ、翔くんは見る目が違うねい」

「つか、おまえら・・・三対一なんざ、男として恥ずかしいと思わねえのか？えれえ、ム力つくぜ・・・」

相沢先輩、瀬名先輩まで・・・大集合だ。どうなってんの？これ。

いきなりの好転は私にとって、ホツとする状況だったものの、示し合わせたみたいないな登場に驚き、涙も引っ込む。

「し、四天王!？」

「なんでここに・・・？」

「どーなつてんだよ、これ・・・」

「っ・・・退け!!!」

焦れた空夜が実力行使に出て、私を押さえつけていた男たちが吹っ飛ぶ。

束縛から解放され、一気に力が抜けた。・・・助かったんだ、私・・・。

「大丈夫か!？ケガは・・・」

「いつ・・・」

「右足首と・・・背中が痛いんやな？ああ・・・顔も・・・酷い・・・」

倒された拍子に捻った右足と、打ち付けた背中が少し痛み、頬も鈍い痛みを訴える。

心配気に覗き込む顔が、私の状態を診て歪んだ。

「殴られたんか・・・くそっ・・・誰や!おれが倍にして返したるっ!」

「ひっ!」

「く、空夜・・・落ち、着いて。僕は、大丈夫だからっ」

「なんで止めるん!？・・・痛いやろ?恐かった、やろ?男、三人掛かりやなんて・・・許せへん。絶対・・・絶対に・・・許せへんわ!!」

今にも殴り掛かろうとする彼の腕に縋り付き、慌てて止めた。

が、怒り心頭な空夜は、簡単に私の制止を振り切り、手近にいた一人の胸倉を掴む。

「空夜！！」

彼が繰り出した拳が頬を打つ寸前、鋭い一喝が飛び、その腕は掴まれた。

「ここから先の処分は、俺たちの仕事だ」

「せやけど・・・周防兄・・・」

「空夜くん。君の仕事は他にあるでしょう？」

納得がいかないと、首を振る彼の背を皆戸先輩がやんわりと叩き、私へと視線を向ける。

場を沈静化するためには、私と空夜の存在が妨げになっていることをすぐに察し、彼の袖を引いた。

「空夜・・・先輩たちの言う通りにして。僕らは寮へ帰ろう？ここには、居たくない」

「翔・・・・・・・・分かった」

深呼吸し、なんとか落ち着いた空夜は、何を思ったのかしやがみこんだ姿勢で背を向ける。両手で招かれ、その意図を理解した。

これは・・・私を背負って運ぶってことだね？

少し恥ずかしく思いながらも、右足に力が入らない事実があり、大人しく従う。軽々と背負われ、高い視界にちよつと感動。

「ほんまは姫さん抱っこしたいとこやけど・・・さすがに、その姿やと目立ってまうからな」

ボソツと言われ、想像してみる。確かに・・・妖し気だ。

「ほな、俺らは寮に帰る。あとは・・・よろしゅう。きつついお仕置き、頼むで」

「任せろ」

「・・・あ、ええと・・・先輩方、ありがとうございました」

ぺこんと頭を下げると、先輩方は一様に暖かい眼差しで見送ってくれた。

それにしても・・・なぜ、空夜は——先輩方は、タイミング良くあの場に駆けつけることができたんだろう？

その謎は、寮に帰って訊ねれば解けるのだろうか・・・。
ともあれ、貞操の危機は回避出来たのだ。

「とりあえず・・・ほつぺた冷やさな」

寮に辿り着き、私をソファアへと下ろした彼は、手際よく救急箱

と濡れタオルを用意すると、腫れて熱を持った頬にあてがう。
ひんやり冷たい感触が心地よい。

「女の子の顔を殴るやなんて・・・あいつら、最低や」

「まあ、男だと思われてたし、仕方ないよ。それに・・・グーで殴られなくて良かった。これなら、冷やしておけばすぐ、腫れ引きそう」

「・・・右足首と、背中も、痛いんやっとな。・・・診せて」

「いや、大丈夫だって。そんな大したことないと思う」

濡れタオルを譲り受けながら、小さく首を振る。

安心させるつもりで言ったのに、目の前の表情は少し怒ったような渋面へと変わった。

「翼の“大丈夫”は信じへん。ええから、とつと診せえや。まずは、足」

半ば、脅すようなそれに渋々、靴下を脱いでズボンの裾を捲り、右足を差し出す。

空夜の手が私の足首を緩く掴み、長い指先が筋を探って上下した。痛めた箇所が分かったのか、救急箱から湿布と包帯を取り出し、やはり手際良く手当てされる。

「これでええ。次は・・・背中やな」

「え？背中なんて、軽く床に打ち付けたただだよ。怪我の内、入らな・・・」

「それを判断するのんはおれや。ほら、早うシャツ脱いで。モタモタしとつたら、剥いてまうぞ？」

本気とも冗談ともつかない言い様に、それでも素直に従ってベストを脱ぎ捨て、躊躇いながらもサラシを解き・胸元を隠しつつ、ワイシャツをはだけさせる。

早速と、彼は私の背後へと周り、そつと背中に触れて来た。

「ん・・内出血して、青痣になつとる・・」

「別に・・見えないとこだから、大丈夫」

「せやから、“大丈夫”は信じへんって」

大きな手の感触。濡れタオルを触っていたせい、冷えたそれがやはり心地よく感じる。いたわりながら背中を撫で、ふと、手が止まった。

「綺麗な、白い肌やね・・余計、痛々しく見えるわ」

「空――」

明らかに手のひらとは違う、柔らかい感触が背中に熱を落とし、心臓が大きく跳ねる。

こ、これは・・。

「く、空夜・・な、なにして・・るの？」

「ん・・早う治るように、おまじない」

羽のように優しいキスが、一つ、また一つと背中に落とされる度、鼓動が早まってゆく。

ええと・・これは・・ただのおまじない。空夜は好意でしてくれているんだから、変に意識しちゃ駄目だ。

ビクビクと身を縮めて耐えていると、背後の気配が動いた。顔の横から覗き込まれる。

「痛いもん？」

「・・・っ・・・痛くはないけど・・・くすぐったいよ」

「ふうん・・痛くはないんやね？せやったら、もうちょい、我慢し縁起モノやし」

「も、もう十分だか・・・痛っ・・・」

どこか底意地の悪い含み笑いで、なおも続けようとする空夜から逃れるため、身体を捻った瞬間、右足首に激しい痛みが走った。

よろめいて傾いた身体を、力強い二の腕が支え、抱きしめられる。

「阿呆！骨に異常はあらへんけど、筋痛めてるんやで？無理したらあかん！」

「・・・ご、ごめっ——」

申し訳なく思い、謝罪の言葉とともに見上げ・・・かち合う視線。それきり、目が離せなくなる。静かに私を見つめる瞳は暖かくて、優しくて・・・。

「・・・ここ、まだ痕残つとるね」

スツと視線が落ち、まだ、うつすらと色残る部分に彼の指が触れた。

サラシの戒めを解いた胸元は、自慢出来るほど豊かではないものの、それと分かる谷間を披露していて・・・あっと思った時には、ゆっくり空夜の頭が下がり、唇がソコに触れる。

「っ・・・」

いつかの朝と同じく、チュッと吸い上げられ、再び、色濃い華が咲いた。

でも、今日の空夜はあの時とは違い、ちゃんと意識がある。意思が・・・ある。

「んんっ！く、空夜・・・っ!？」

胸元から首筋へと移動する唇。顎に触れ、唇の端ギリギリにキスを落とし・・・額を摩り合わされた。

その艶っぱい一連の動作は未経験の領域で、彼の一挙一動にいちいち身体が震えてしまう。こんなの・・・どうしたらいいの？わかんないよ・・・。

「・・・翼。なんで、こない固くなつとるん？おれら・・・もう、身体重ねた仲なんやろ？」

「そ、それ、は――」

「なあ・・・ほんまは・・・してへんのとちゃう？」

私の動揺を見透したのか、探るみたいな視線と言葉を投げかけられ、激しく首を振った。

「っ・・・し、したよ！へ、変な言いがかりつけて、責任逃れしようつての！？酷いよ、空夜っ！」

もし、一線を越えてないと解つたら、空夜が責任を感じて私に力を尽くす理由がなくなってしまう。そうなったら、私はこの不利な環境下、独りで・・・。

そんなの、もう、無理だ。

彼が常に傍にいるという状態に慣れて過ぎてしまった今、独りでなんて頑張れない。

・・・どうしよう・・・こんなつもりじゃなかったのに・・・。

いつの間にか、私にとって、空夜は無くてはならない存在になっていた。

「せやったら・・・しよつか」

「なに、を・・・？」

「仕切り直しで、もつかいしよ言うてんねん。翼は覚えとるかもしれへんけど、おれ、全然覚えてへんし・・・それって、不公平やない

「？」

「で、でも・・・」

「大丈夫やって。初めてやったら、ものごっつい・・・それこそ、泣き叫んでまうほど痛いやるけど、二回目やったら・・・まあ、ちょい苦しいぐらいで済むと思う」

言われ、顔が引き攣る。

当然、私は前者なわけで・・・初めてって、泣き叫ぶほど痛いんだ・・・。

ということは、このまま話が成立してしまえば、初めてだって悟られないためにも、痛くない演技しなくちゃならないってこと？泣き叫ぶほど痛いのに？

ちらりと悩みの種の表情を伺ってみれば、やはり、どこか疑っているみたいに目を眇められる。やるしか・・・ない。

「わかった。確かに、少し不公平だね。うん・・・しょ」

「・・・本気か？」

「は、初めてじゃないしさ。泣き叫んだりしないから・・・大丈夫！」

「翼・・・おれは――」

なにか言いたげに口を開いた空夜は、しかし、小さく息を吐いただけで、押し黙ってしまう。少しの間を置き、身を剥がした彼は、言葉を発しないまま、初めての行動へと移った。

大きな手が首の後ろに周り、そつと上を向かされて・・・今度は端ではなく、唇そのものが触れ合う。ギュッと目を瞑り、成されるがままに任せた。

「ん・・う・・」

自分のものではない、他人の熱・・これが私のファーストキス。そして、これ以上のことも空夜と・・そう、自覚した途端、一気に緊張してくる。心臓が壊れそう・・息が苦しい・・怖い・・。あらゆる不安が私の中でどんどん膨れ上がり、演技しなくちゃいけないのに、泣きたい気持ちでいっぱいになってしまった。

「・・はあ。翼・・もう、ええ。おれ、降伏する。泣く一歩手前の顔しとる女を、これ以上、苦しめられへん」

諦めとも、呆れともつかない、困ったような囁きと同時に優しく頭を撫でられ、恐る恐る目を開く。

もういい？降伏って・・なんのことだろう。
私の戸惑いを察し、空夜はすぐに言を次ぐ。

「俺と翼がしとらへんことは・・あの日の時点で解つとったんよ」
「・・え？そ、そんなことないよ！？私たち、確かに――」

「いや、しとるわけがない。どうやら、翼、そういう知識あやふやみたいやから言うけどな。ほんまに初めてしてもーたんやったら・・出血しとるはずやわ」

「出血・・？初めてって・・血出るの！？生理みたいに？」

「ま、人それぞれやけど・・。ただ、男の側がろくに意識なかったんやったら、相当に痛い初体験になっとって、事後、あんなケロつとできるはずない。せやから、嘘なん、バレバレや」

「そう、なんだ……。そう、だったんだ……」

事実を知り、身体から力が抜ける。涙腺も緩んで、涙が溢れた。嘘をついた自分も悪いけど、それ以上に……。

「空夜の……バカ！知ってたんなら、知ってたって、早く言つてよ！私、どんな思いで……. どんだけの覚悟で、しよって言ったと…….」

「翼かて悪いんやで？おれの気持ちないがしろに、利用したやんか。さすがに傷ついたわ……. ちよつと意地悪したくもなるやる」

「う…….そこは…….ごめん……. 必死だったんだもん…….」

「いや、おれも……. ごめんな？器の小ちやい真似してもうた。せやから、両成敗つちゅうことにして、お互い責めるのんはやめよ。な？」

「…….うん」

にっこり微笑み、抱きしめてくれる空夜の腕は、とても暖かく、例えようもない安堵感が広がる。目の前の彼は、損得抜きで私の力になってくれる人なんだ…….

この期に及んで、ようやく、私はそのことを思い知ったのだった。

09・何度でもこつして、ほら

私の中にある彼への想い、それは――。

「空夜つてさ・・・」

「ん？」

「善い人だねえ」

しみじみ呟くと、抱きしめていた腕がゆるゆると力を無くし、肩口にあった彼の頭が重みを増した。

「空夜？どうしたの？」

「・・・それ、男としてはえろう複雑な気分になる・・・」

「ええ？なんで？褒めてるのに・・・」

「褒め言葉なんは解るよ。けどさ、それ言われてまうと男は・・・」

パツと顔を上げた空夜は、ひどくバツが悪そうに言葉を濁し、目を逸らす。

「とりあえず・・・着替えへん？目のやり場に・・・めっちゃ困る」

「あ」

指摘を受け、はだけたままだったシャツの襟元を慌ててたぐり合

わせた。

って言っても、元を辿れば、空夜が・・そう考え、以降の艶っぽい一連の出来事が走馬灯のように頭を駆け巡り、顔が火照る。

「どーせ着替えるんやったら、風呂入ってもうたら？飯は・・あんま外出たないやろし、出前頼んどく。さっぱりしたら、色々落ち着けるやろ」

知ってか知らずかの提案に、私はコクコクと頷いた。

早速と立ち上がってバスルームに向かおうとするのを、けれど、止められる。

入れと言ったのに止められて、訳が解らず抗議の目を向けると、空夜の手が私の膝裏と背中を支え、ふわりと身体が浮いた。

「わっ・・く、空夜っ!？」

「風呂場まで連れてったる。さっきは・・姫抱っこできへんかったしな」

「い、いいよ!すぐそこじゃん」

「ええからええから」

結局、彼の意のままに運ばれ、洗面台の鏡に映った自分の姿に“複雑な気分”とやらを理解する。

その筋の人が見たら喜びそうだけど・・絵にならないなあ。

「足痛うて大変やろけど、一緒に入るわけにはいかへんし、とにかく

くゆーっくり入り？どうしても手助け要るんやったら、遠慮なく呼ぶんやで」

「・・・ありがとう」

言われた通り、痛めた足を、背中を庇いながらゆっくりの入浴に努める。

浴槽に張られたお湯に身を沈め、長い長い安堵の息を吐いた。ここへ来て、こんな風にゆっくりお風呂に入れるのは、初めてだ。いつも気が気じゃなく、落ち着けなかったもん。

でも、今は違う。壁一枚隔てた向こうにいるのは男の人だけ・・・空夜だし。

それは絶対的な安心感。空夜は特別な存在だ。

「特別か・・・」

そーいえば・・・私、空夜と・・・キスしちゃったんだよね・・・。
その事実には、お湯に浸かって温まったのとはまた違う種類の熱が、身体の内側から溢れ出し、顔を熱くした。

「翼、問題あらへん？」

「へ？あ・・・く、空夜！？えっと・・・だ、大丈夫っ」

「翼の“大丈夫”は不安やけど・・・まあ、信じたる。着替え、ここに置いとくな？翼の荷物勝手にいじれへんかったから、おれのシャツ着とって」

「う、うん」

息を詰めて、彼の気配が遠ざかるのを待ち・・・逆上せる寸前でお風呂から上がる。しまい隠していた下着を引っ張り出して手早く身に付け、彼が用意してくれたシャツを手に取り・・・。

「でかつ」

着てみれば、袖は余り、裾は膝辺りにまで達し・・・体格差そのままだに、ブカブカだった。とにかく、と、余った袖を邪魔にならない程度に綺麗に折って・・・あれ？スボンがない・・・。

「忘れたのかな？ま、いいか」

さして気にせず、髪を乾かして、バスルームを後にする。

「翼、風呂終わっ・・・」

「うん、お先に・・・ん？」

ソファでくつろいでいたらしい空夜は、私の姿を見止めるなり、半端な姿勢で固まり、じつくりと私を眺めた。

つま先から頭の先までを視線が上下して・・・不格好だっと思ってるんだろっか？

「・・・これ、そんなに、変？ブカブカなのは仕方ないでしょ。空夜

と私じゃ、サイズ合わな——」

「かわええ」

「は？」

「いや・・・ほら、サイズの合わへん大っきいシャツ、女の子が着るのつて・・・ええなあて」

「はあ・・・」

これがいいのか・・・男子の趣味は、よく解んない・・・。

「うし、ヤル気出てきた！ほな・・・」

「え・・・」

や、やる気？やる気って・・・なんのやる気！？

「く、空夜・・・？」

無言で距離を詰めて来る彼を見、身体が畏れて後退しようとする。右足に体重が乗った刹那、痛みが走り、その場にしゃがみこんでしまった。

「翼！」

「痛っ・・・」

「・・・あほう。怪我しとる女、どうこうするわけないやろ？ほれ、足診せて。湿布張ったるから」

未遂で終わったし、真相をはっきりさせるためだったとはいえ、
ついさっき、迫ったのはどこの誰よ？

「キスしたくせに・・・」

口を突いて出てしまった不満たっぷりのそれに、慌てて唇を噛み
締めたけど、後の祭り。

意地悪く目を細め、ニヤツと不敵に笑む顔。

「あれって、やっぱり、初めてやんな？おれ、翼のファーストキス
の相手っちゅうことか。なんやったら、もう一つの初めても貰ても
えんやけど・・・」

「っ・・・そ、そんなことより・・・私、訊きたいことあるんだけど！」

どうにも気恥ずかしく、居たたまれなくなって、苦し紛れにそんな
ことを言ってしまう。

なに？と首を傾げられ、たっぷり逡巡した末に・・・ああ、そうだ。
訊きたいこと、確かに一つあった。

「どうしてタイミングよく、助けに来れたの？」

「・・・ああ、それが・・・」

あからさまに機嫌が悪くなる空夜に、私は戸惑う。

「翼、ずっと見張られとったから」

「は！？なにそれ」

「せやから・・ ㊦やってん。おれも今日、呼ばれて、初めて知った・
・ 最悪や」

私が㊦？一体、なんの？

「周防兄が寮長で、生徒会長でもあるのんは知つとるな？そして、
同じ三年の寮生とともに四天王と呼ばれ、生徒会を構成する役員で
あるのんも」

「うん」

「それを良しとせえへんで、兄いらの揚げ足取りに精を出す輩がお
つて・・ 俗に言う、反乱分子や。これまで、何度か指導したみたい
やねんけど、上手い具合尻尾キリで、頭抑えられへんかったんやて」
「はあ・・ それと私が㊦って、どういう・・」

ぐぐぐつと空夜の眉間に皺が寄る。

うわっ、更にご機嫌斜め？

「・・ “翔”が周防兄らのお気に入りなんは、結構、有名で・・ や
つらも目付けとったらしい。いつもはおれが傍におったから手出せ
へんかったんやて。せやから、おれだけ呼び出して引き離し・・ わ
ざと“翔”を独りにしたんや」

「あー、なるほど」

それで、困か・・納得。

ってことは、相沢先輩の買い物も計画の一つで・・だったら、リップ代返さなくていいよね。恐い思いした慰謝料ってことにしよう、うん。

「で、あいつらは？」

「現場抑えたからな。退学にこそならへんけど、停学処分やって。かなりキツく指導したみたいで、もう、悪させへんよう約束させたって・・周防兄からメール来とった」

「そつか。んじゃ・・一件落着ってこと？」

「あつちは、な」

まだ他になにか？小首を傾げる私の様子に、彼は苦笑する。

「こっちの一件はまだ、落着とはいかへんやろ」

「こっち？」

「・・翼は、いつまで“翔”で居れるん？」

「あ・・」

言われ、自分が弟の身代わりである現実を思い出した。

あまりに自然に通えていたから忘れていたけど・・男子校なんだよね、こじ。

「・・・翔がどれくらい回復してるかにもよるけど、多分・・・あと、二十日ぐらいかな」

「二十日か・・・長いようで、短いな」

「そう、だね・・・」

翔の怪我が治れば、私はお払い箱。そうだった但最终、滅多なことで、足を踏み入れられない・・・敷居の高い領域になってしまう。先輩達やクラスメイト、そして・・・空夜と一緒に居られるのは今だけ。

今だけ・・・なんだ。

その事実は思った以上に重く、私の上に押し掛かった。

凶作戦が功を奏したのだろう。

学校内は平和そのもので、寮生活も特別、苦になるようなことはなく、日々を快適に過ごしていた。

そんな折、携帯に一通のメールが入る。

——翔からだった。

『喜べ！死ぬ気で頑張つて、明日、退院出来ることになった。今まで、ありがとな。明後日、入れ替えしよう。お互い、元に戻るんだ
by 弟』

私にとって、それは、終焉を迎える知らせ。
ついに、来るべき日が・・・来てしまう。

役目を終えた瞬間、私はここでの生活の全て、関わったものの全てを切り捨てようと思っていた。そう、決意させるに至る原因の大半は――。

「翼？難しい顔して、どないしたん。まだ、傷が痛むん？」

神妙な顔つきでベッドの縁に腰掛けてるところ、お風呂上がりの空夜に声を掛けられる。

「ううん、傷は平気。ベット譲って貰って悪いね・・・あと、パジャマ代わりにシャツ借りちゃった」

「ええよ、そんならいお易い御用や。その足でハシゴは登れへんし・・・ま、心配なんは、おれの重みで上のベッドの底抜けへんかなー？ちゅうぐらいや」

「ふふ・・・下敷きになるのは嫌だなあ」

冗談混じりのそれに、私は小さく笑みを返した。

そう、原因の大半は、目の前の彼・・・空夜の存在。

・・・私は空夜が好きだ。

例え、お互いの想いが一緒に、付き合ったとしても・・・いつか、その距離が二人の仲の妨げとなるだろう。

私たちは本当に多く、二人で居過ぎてしまったのだ。

男子校に通い、寮生活の空夜。女子校に通う私・・・逢える時間はごくごく限られる。たまの逢瀬で満足出来る自信がない。

好きになり過ぎるつても・・・微妙だわ。

はぁ・・・と、深いため息が洩れた。

「やっぱ・・・どっか、具合悪いん？遠慮せんと、欲しいもんあるんやったら、言いや」

私の隣に腰を下ろし、心配気に覗き込んでくる顔。暖かく微笑み、優しく頭を撫でてくれる大きな手のひら・・・そのどれもが愛おしいと思う。好きだ、と、思う。

しかし、明日にはここから去らなくてはならない。

だから、今日、この夜、想いにけじめをつけなくては・・・。

「空夜が・・・」

「うん？」

「・・・欲しい」

「は？」

「・・・この前言ったよね？私のもう一つの初めて貰ってもいいって・・・だったら、貰って欲しい」

「・・・唐突にどないしたん。それがどういいうことか・・・解って言うところ？冗談やったら、笑えへんよ・・・」

「私は本気だよ。現にこのシャツの下・・・なにも着けてない。ほら・・・ね？」

頭の上にあった手を取り、そっと胸元へと導く。薄い布越しの感

触に、言葉が嘘でない事実を知り、彼の顔が強張った。

「・・・洒落にならんで。ほんま、勘弁や・・・」

「っ・・・冗談や、洒落で・・・言えるわけ、ないじゃん！空夜は・・・もう、私が好きじゃない？こ、こんな浅ましいお願い・・・迷惑、かな？」

「翼・・・」

はぁ・・・と、私以上に深い深いため息を吐き、空夜の手が離れる。露骨過ぎて退かれたのかな・・・激しい後悔と羞恥、なにより、一世一代の決意が儚く夢と消えてしまったことがやりきれず、グツと胸が詰まった。

「・・・ごめん、変なこと言ったね。忘れ――」

言い終わらない内に、唇を塞がれる。

それはすぐに離れたものの、代わりとばかりに、ギュッと抱きしめられた。

「あかんわ・・・もう、無理。我慢、切れた・・・ええねんな？今から貰うで・・・翼を」

熱い吐息混じりの囁きに、私はただ、静かに頷く。

「翼・・好きや。おれのものになって・・」

「・・空、夜・・怖い・・私・・っ」

「安心し、恐ない。翼の全部、受け止めたるよ？何度でもこうして・
・ほら、抱きしめたるから」

「・・っ・・う・・」

「・・なあ、翼は・・おれのこと、好き？彼女に、なって・・くれる？」

甘い・・甘い告白と、未知の感覚に翻弄されながらも、私は最後まで彼に自分の想いを打ち明けなかった。

そして・・夜が明ける。

この学校で過ごす最後の時間は——いや、空夜との時間は、終わったのだ。

10・ラスト・チャンス

替え玉騒動から、二ヶ月が経った。

私は今、本来の性別、本来の名前・棕本翼で、女子校に通い、女子寮で生活している。

そして、弟の翔は無事に退院した後、私と入れ替わって男子校に通い、男子寮で生活している・・だろう。

断言できないのは、あの日以来、ほぼ、弟と顔を合せることはおろか、携帯でメールすらし合っていないからだ。

翔に連絡を取れば、同室である空夜に気づかれ、こちらが望まなくともあの手この手で接触を試みてくるに違いない。

実際、私が寮を去った後、何度も空夜から携帯に連絡が入った。メールも沢山届いて・・けれど、私はそのどれにも応じず、挙げ句、携帯自体を変えてしまった。

当然、家にも戻っていない。

そう、私は徹底して、彼を避けていたのだ。逢わない時間が長くなり、ほとぼりが冷めれば、きっと空夜も諦め、私への興味を無くすだろう、と。

もし、付き合うことになっていたら、この距離は二人の仲をもどかしくするだけの邪魔な壁でしかないのに、こうして逃げ回るのに、とても優秀な防壁となる。

一方の私はといえば・・興味を無くすどころか、ますます、彼への想いが募り、とてもではないが忘れられそうになかった。

「元氣だと・・いいな・・」

「例の彼が気になる？」

授業が終わり、寮へと向かう帰り道。心の中で呟いたつもりが・声となつて出てしまつていて、私の隣を歩く、私より背の高い黒髪の彼女を、苦い顔で見上げる。

「真央ちゃん・・」

「ふっふっふー。傷心な乙女の表情はそそりますなあ」

からかいを含んだそれに、私は更に苦く眉を顰め、少し嗜める意味も込めて睨んだ。

彼女は本条寺真央。ほんじょうじまお私の中学からの友達で、女子寮では同室の寮生でもある。真央ちゃんは素知らぬ表情で、なおも言う。

「そんな気になるんなら、逢いにいけばいいのにさ。黙って別れちゃったこと、後悔してんなら、謝つて、元の鞘に戻ればあ？」

「・・出来るわけないじゃん。なんか・意地が悪いよ。真央ちゃん」
「ああら、あたしにひとつことの相談もせず、連絡もよこさなかった人が、なあに言つてんのかなあ!？」

「う・・だから、それはゴメンつて。もう、いい加減、許してよお・真央さあん」

その点だけは、本当に申し訳ないと思い、何度も何度も頭を下げた。

ジッと私の顔を見つめていた切れ長の目が、フツと柔らかく微笑む。

「ま、小動物苛めはこれくらいにしますかな」

「しょ、小動物！？ちょ・真央ちゃん！？」

「——んなことより、噂、聞いた？」

んなことって・・軽く流された！酷っ！！

ジト目になりながら、首を横に振る。

「あら・・知らないんだ？そっか、知らないか・・そうだよ。知ってたら、落ち着いてなんていられないよねえ」

だから・・なんですか、その意地の悪い言い方は。

やっぱり、真央ちゃん、まだ私のこと許してないんですよ。まだまだ苛めるつもりでしょ。厄介な相手の機嫌を損ねてしまった現実に私は頭を抱えた。

どうやってこの子のご機嫌を回復しよう・・？

無意識に歩みを止め、押し黙って考える。

と、不意に腕を掴まれ、グツと引かれた。驚いて見上げると、そこには——。

「か・・甲斐谷先輩！？」

今時珍しく染め上げていない黒髪をした、威圧感ある落ち着いた風体の男子生徒がいた。

断っておくが、私が今居るのは、女子校だ。右を見ても左を見て

も、女子ばかり。女だらけの空間、女しか立ち入られない場所に、なぜ先輩が・・・？

「・・・椋本？」

ハッ！というか、私、今は“翼”だったんだ。なんで、先輩がここに居るのは解らないけど、私が替え玉してたことなんて知るはずもないし・・・。

そうよ。翔に似てたから、びっくりして引き止めたってところかな・・・？

「あの・・・」

「・・・見つけた。話がしたい。そのきみ、この子、少し借りてもいいか？」

「あー・・・はいはい。どーぞどーぞ」

「真央ちゃん！」

「ありがとう。——行くぞ、椋本」

本人は了承していないというのに、腕を取られたまま、半ば強引に学校へと引き返し・・・辿り着いたのは事務室。

「すみませんが、奥の部屋お借りします」

「甲斐谷くん？はいはい、どーぞどーぞ」

私たちを見止めた事務員さんは、真央ちゃんと全く同じ言葉で了承し・・・ってか、ここ、女子校よね？なんで男子の甲斐谷先輩が・・・男子校の生徒会長が顔パス？

疑問符がいっぱいながらも、先輩に促され、彼の対面に腰を落ち着けた。二ヶ月ぶりにみる顔は殆ど変わりなく、元気そうだ。

お互い、言葉なくジツと見つめていたが、少しの間を置き、おもむろに先輩は言った。

「ふむ・・・こうやって見ると、やはり女の子だな。制服一つで、よくバレなかったものだ」

「あ、あの・・・私・・・」

「きみが弟の替え玉をしていたことは、知っている」
「は！？」

先輩の爆弾発言に、私は飛び上がらんばかりに驚いた。え・・・知ってるって・・・バレてたってこと？一体、いつ・・・

「いや・・・正確には、知らされていたと言っべきか・・・俺の父が、きみのお母さんと・・・その、懇意にしているね。フォローをと、頼まれたんだ」

「つまり・・・初めて声を掛けた時には、すでに知っていたと？」
「そういうことだ」

それが本当なら、先輩も相当な役者だ。私、全然気がつかなかったよ・・・

「まあ、学年も違うし、フォローというほどのことはしてやれなかったが。その分、空夜が傍にいたから、大丈夫だと踏んだんだが・それはそれで、少々、問題があったようだな」

その単語を耳にした瞬間、ビクツと肩が震える。
ギョツと拳を握り、恐る恐る訊ねた。

「先輩・・翔、は・・元気でやってますか？」

暗にすり替えた名称を、先輩はすっかり脳内変換してくれたようで、彼の現状を雄弁に語ってくれる。

「・・入れ替え当初はかなり荒れていたぞ。『翼が居なくなつた、連絡が取れない』とな。今は少し落ち着いた。表面上は、だが」

「そうですか・・」

「どうやら、そっちも気になっているようだな。連絡取ってみたらどうだ？」

何気ない風に提案され、首を振る。

今更、そんなことできない・・私は覚悟を決めて、あの日を最後にしたのだ。

「それは・・無理です。・・なにより、男子校と女子校。男子寮と

女子寮とじゃ、距離がありすぎる」

「そんなもの些細だろう？世の中にはもっと遠距離で付き合っている男女もいる。大事なのはお互いの気持ちだと・・それとも、きみにはもう、彼を想う気持ちがないということか？」

「っ！・・気持ちがあるからこそっ！・・たまに逢うだけじゃ、もう、満足できないんです。・・私たちは、長く傍に居過ぎたんですよ・・」

じわりと眼の縁に涙が盛り上がる。空夜のことを考えるだけで、胸が苦しくなる。まだ、こんなにも彼を想っている。

けれど、気持ちだけではどうにもならない現実がある。

「きみは、まだ彼のことが・・」

「・・・・好きです。大好き、なんです・・だから、この距離が辛い。常に一緒に居られないなら、離れていた方が・・楽です」

「・・そうか・・」

理不尽に不可解な部分の多い私の訴えに、けれど、先輩は納得してくれたのか、小さく頷き、押し黙った。

感情が昂り、つい思いのままを打ち明けてしまったけど、はつきり言って、第三者である先輩にしたら傍迷惑な愚痴だったろう。

おまけに、相手こそ違えど、おもいつきり色濃い告白してるし・・恥ずかしい。

「と、とにかく、彼のことはもう吹っ切りますんで！それより、なぜ、甲斐谷先輩はここに？」

「ん？ああ・・・ちょっと野暮用で、ね」

「野暮用、ですか・・・？それは、一体・・・」

「――棕本、すまんがそろそろ戻らないと・・・引き止めて悪かった。逢えて良かったよ」

自分の腕時計を見、先輩が急かすみたいに立ち上がる。

「はあ・・・いえ、こちらこそ。あの・・・弟に逢ったら、こっちは大丈夫だって伝えて貰えませんか？色々あって、携帯も変えちゃったので連絡が・・・」

それに倣い、慌てて立ち上がりながら、今度は言葉そのままの意味でお願いした。

意図を汲み、任せるとばかりに大きく頷く甲斐谷先輩。

取る物も取り敢えず事務室を出て、急ぎ足で去る高い背が一度、私を振り向き――。

「また逢おう、棕本」

「・・・さようなら、甲斐谷先輩」

『また』か・・・次に逢うのはいつになるだろう。必然でもない限り、逢う機会などありそうもないけど・・・。

しかし、皮肉にも、私はすぐその機会に恵まれることになる。

更に一ヶ月経った後、真央ちゃんの言っていた“噂”がその機会となり、必然として私の身に降り掛かったのだった。

「・・・ありえない・・・嘘だ。こんなこと・・・ありえない・・・ありえない・・・」

張り出された新たなクラス表を前に、私はひたすらに同じ言葉を繰り返し、狼狽える。

と、背後からたおやかな両手がにゅっと伸びて、ふわりと花の香りを巻き散らしながら、私の腰を抱く。

「ああ、あたしと同じクラスになったのが、そんな奇跡的に喜ばしいこと？ 光栄だなあ、棕本翼ちゃん」

「しーっ！ 真央ちゃん・・・大きな声で名前呼ばないでよ」

「あーあー、騒がしくてよく聞こえない。なにかなあ？ ツ・バ・サ・ちゃああんっ」

真新しいペンキの匂いにする校舎。

男女入り乱れた廊下で、それでも真央ちゃんの澄んだ声は数人の興味を惹く。

「翼ーーーーっ！」

そんな中、更に大声で名前を呼ばれ、意気揚々近づいて来る顔に、私は本気で殺意が沸いた。

心中を察することなく目の前に立った彼は、真央ちゃんの腕をやりわり解きほぐすと、自分こそがと私を抱きしめる。

「はぁ・・・ホント、元氣そうで良かった・・・。甲斐谷先輩に聞いてたけどさ、ちゃんと自分の目で見るまでは、安心できなくて」

「・・・翔。久しぶり・・・」

私と瓜二つの顔がニコニコと、安心した笑みを満面に浮かべた。

双子ということもあり、一気に周りの人の注目が集まる。あああ・

・目立ちたくないのに・・・翔が居るってことは、つまり——だもん。

「しかし、まさか合併とはな！。ただの噂じゃなかったんだな」

「だいぶ前から持ち上がった話らしいけどね。男子校の生徒会長が意欲的に動いてくれたおかげで、ようやく実現したとか・・・つか、翼から離れなよ。シスコン」

「男子校と女子校の間にあった大学が経営不振とかで、支援と教育の幅を広げる目的で、三校合併の大学付属になったんだっけ・・・つか、うるさいな。僕に指図すんな、魔女」

丁寧なご説明をどうも・・・甲斐谷先輩がなぜ、女子校で顔パスだったのか。その謎は解けた。

彼の頑張りで男女共学となってしまったことは、正直、ありがた迷惑だ・・・両者間で揉みくちにされながら、私は別の件で頭を抱える。

新たなクラスメイトとして名を連ねていたのは、親友の真央ちゃん、弟の翔だけではなく・・・今、私が最も顔を合せ辛い彼の名も記されていた。

意図的なものを感じてならない・・・甲斐谷先輩め・・・

どうしよう・・・考えても、出るのは溜息ばかり。

いい加減疲れ切って、私は考えることを放棄した。なるようにしかならない・・・それに、あんな形で逃げ去り、一切の連絡を絶って、一方的に別れたのだ。

彼が同じ気持ちで居てくれる可能性は、奇跡的な数値だろう。呆れ果て、嫌われてしまっている確率の方が、ずっと高い。

そうだ・・・見知らぬ他人として、素知らぬ風に振る舞えばいいんだ・・・

「それはそうと・・・翼、空夜見なかった？先に来てるはずなんだけど」

「・・・さ、さあ？・・・ごめん、私、ちょっとトイレ行って来る」

「んじゃ、あたしも・・・」

連れ立ってついて来そうな彼女を、私は慌てて押し止める。

「いや、混んでそうだし、真央ちゃんは翔と先に教室行っててよ。鞆だけお願い」

「えー・・・シスコンとお？」

「だから、シスコン言うなって、この魔女」

「そっちこそ！あたしの名前は真央。まーお！だいたい、シスコンはシスコンじゃん。それとも・・・ナルシストって言おうか？自分とそっくりの顔した翼大好きなんてさ、ナルシストだよねえ」

「な、ナルシストお！？か、勝手なこと言つなよ！僕と翼は全然違うだろ！？」

二人の言い合いは今に始まったことではなく、それが微妙なラインながら、顔を合せる度の日常茶飯事的軽口であることを知っている私は、苦笑しつつも、こっそりその場から離れた。

こういう時の逃げ場と行ったら、あそこしかない。賑わう廊下を擦り抜け、小走りに階段を登る。

「あつ・・・！」

トン、と、すれ違い様、肩がぶつかり、倒れ込みそうになったのを、素早く伸びた手に捕まれ・・・あれ？
妙な既視感を覚え、呆然としてしまう。

「大丈夫？」

案じる声が掛かり、慌てて、頭を下げた。

「う、ごめんなさい！」

「・・・いや」

「あの・・・有り難うございました。それじゃ・・・」

深々と頭を下げながら、より濃い既視感に襲われ、頭を捻る。

「『それじゃ、急いでますので・・・本当に、有り難う!』・・・初めて遭ったとき、そう言っ、顔も見ずに去って行ったなあ?」

この独特のイントネーション・・・なにより、この声・・・

それじゃ、病院で助けてくれたのは・・・彼も甲斐谷先輩と同じく、最初から私が“翼”であることを知っていたということ? 軽くパニックに陥る。

「顔、見てくれへんの? 恩人やろ、おれ。それとも、おれが誰か、忘れてもった?」

忘れるはずない・・・忘れられるはずがない。

顔を見なくても、それが誰かなんて声だけでわかる。だからこそ、上げられないよ。

「つーばーさー? 頭、上げて。顔、見てえや」

「・・・やだ」

「くくっ・・・相変わらず、強情やねえ。ほなら、実力行使や」

言っが早いか、私を軽々と抱き上げ、屋上へと続く階段を登ってゆく。

「ちよつ・・・！」

「大人しくしときよ？翼には、訊きたいこと、言いたいこと、いっぱいあんな。もう、これがラストチャンスやってぐらい、腰据えてみっちり話す気満々やから、観念せい」

固い決意を込めての宣言は、どれも私にとって、決して喜べる状況ではないのだけど・・・抱く腕、声、眼差し、そのどれもが優しく別れた時と変わらない想いを感じた。

彼がまだ、同じ気持ちを持っていてくれる事実・・・自分の内側から溢れる想いを、もう抑えることはできない。

「空夜・・・す、き・・・」

震える声で囁き、首に手を回して抱きしめる。

「・・・私、やっぱり空夜が好き・・・すごく、すごく・・・大好きだよ」

「つば、さ・・・」

「私を・・・彼女にしてくれる？」

あの夜、言えなかった言葉を思い切って口にした。

「・・・言つたやろ？おれ、翼に一目惚れしたんやって」

やんわり身を剥がし、ひたと見つめる瞳が嬉し気に笑う。
答えは・・・わかっていた。

「病院で助けた時から、そのつもりやったわ」

二人の距離が一気に縮まる。
奇跡的に屋上には人影がなく、私たちは三ヶ月の溝を埋めるみたいに思う存分口づけし合った。

学校が生まれ変わったこの日、私と空夜の関係も新たなものとして、スタートしたのだった。

【ブレンド・終・】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9901s/>

blend-ブレンド-

2011年11月15日09時53分発行